

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十五年十月二十五日 印刷
昭和四十五年十一月一日発行 (毎月一日発行)
(第六十二号)



No. 62

特集・はたらくうた

十一月号



灘 西宮酒造 釀

清酒 日本盛

ニホンサカリ

超特撰 (化粧ケース入)
一、八リットル詰・一、四一〇円



超特撰 日本盛

みがきぬかれた 灘の酒

えらばれ



料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅



焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

和 而 不 同

孔子はえらい事を言った。「君子は和して同せず、小人は同じて和せず」と。独自性はなくせに和合して行こうともせず内ゲバを続けるのが小人。仕末におえないのは主張もなく融和もなく何でも反対という輩。去る9月13日万博閉会日に若いアメリカのホストがNHKのインタビュウで、「半歳の間眺めて居て個人としての日本人と、団体の引率に熟々と歩いてゆくグループとしての日本人。この二つの姿が余りにも違っているのには驚きであった」と言う。和して同ずとも言うのだろうか、猛暑の中の大混雑にご苦労さまの

事である。私達の社会で各々自主性は堅持しながら互に個の間の対立は避けてゆく、これが君子の道とあれば凡人には一寸難しい注文のようでもある。長いものに巻かれてゆくの賢い世渡りと心得る輩ばかりになって終うては権力や野心家に掻きまわされ、結局泡のように消えてゆく運命である「個性を伸ばせ」と終世叱咤された路郎先生のお言葉が万博閉会日にそぞろに蘇って来るのであった。

中 島 生 々 庵

さぼてんの身構え棘のまま無口

埋み火のまだ燃えつきぬ姿にて

老醜の物怯じをせぬ床柱

手品師の見せ場にも似て盗み食い

四天王寺詣り

亀の池さてこれからは亀の群

弓削駅前にある路郎先生の「俺に似よ」の句碑。(有信新之助氏撮影)



川柳塔十一月号目次

和而不同

川柳塔……(同人作品)

文字の難しさ

川傍柳初篇研究……(八十八)

前田喜代人・岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

「旅人」以後の麻生路郎作品……(4)

先生とはなんぞや

近作柳樽

秀句鑑賞

……(同人吟)

九輪抄

万博句抄

座右の句

俺に似よ 俺に似るなと子を思ひ

私の句

悔いのない今日一日の服をぬぎ

(路郎)

中川滋雀

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

中島生々庵……(1)

中島生々庵選……(4)

若本多久志……(2)

(18)

(20)

東野大八……(22)

北川春巢選……(30)

川村好郎……(24)

若本多久志……(25)

清水白柳選……(40)

小谷葉子……(26)

文字の難かしさ

若本多久志

日本語や、日本の文字の難かしさについては、イヤという程痛感させられております。短詩文学にたずさわるものは、言葉や文字の勉強が大切であると、亡き路郎先生に教えられた事を、今更のように思い出したのでございます。

それは、かれこれ十五、六年前だったと思いますが、路郎先生から、川柳雑誌に載せる随筆を四、五枚程度で書くようにとのお手紙がありましたのですが、ぐで切日を四、五日過ぎてでも送れませんでしたので、お電話があり「明日中に持って来い」との厳命でした。

あわてて、ガサガサと書いて翌晩お宅へ届けに行ったのですが、

「まあ、上がれ」ということで先生の書齋に座り、原稿を出しました処、先生は黙ってこれを読み終わると、良いとも悪いともおっしゃらずに、

「多久志君、たった四、五枚の文章に、誤字と当て字が五つもあるやないか、もっと念を入れて書かなあかん。よく文字を知っている

残照の感動

川柳五十三次……(四)

橋高薫風……富士野鞍馬……

(60)

はたらくうた……(同人特集)

静観堂・千代・久志良・瑞枝・史好・正朗・克枝

(42)

失明は……

高鷲亜鈍……

(29)

近詠

諸家……

(29)

山陰の人たちに会う

不二田一三夫……

(46)

雅号ぶっちゃけばなし

都倉求女……

(51)

初歩教室

本田恵二朗……

(50)

大萬川柳「美男」

清水白柳選……

(52)

きのう・きよう

本多柳志……

(39)

柳界展覧

(薫風)

(54)

本社十月句会

(庸佑)

(56)

各地柳壇

(文秋)

(61)

「世渡り」
一路集「サンブル」

野田素身郎選……
隠岐不醉選……

(48)

「前置き」
編集後記

川竹松風選……
(三夫)

(49)

座右の句

俺に似よ 俺に似るなと子进行

(路郎)

私の句

凡人で人生つつがなく暮し

菊田 いさむ

事は、その人の精神的な財産やからなあ」と言われたのであります。

私は頭から冷水をぶっかけられたような思いで、帰って来たのを今でも記憶しております。

又ある時、川維の川柳塔に出した句に、「馬護切る思い薄情に似たれども」というのがありますが、これは皆さんも、ご承知の通り中国の故事に、「泣いて馬護を斬る」というのがあり、それを引用して、有能な部下がある事情の為に辞めさせる決意を詠んだのですが、原稿紙に清書する時、辞書を繰るのが、じゃまくさいのと、べ切日ぎりきりだったので、つい「馬シヨク」の「シヨク」を仮名で書いて出してしまったのです。

次の句会で先生にお目にかかった時、「あの句は、固有名詞に意味があるのだから仮名で書いたのでは、命のない句になっちゃう。」と訓されて——辞書をくらずに、道楽書きをした事に反省をした思い出がごさいます。

今、川柳塔の編集をお願いしている一三夫さんが、誤字や当て字、送り仮名を、やかましく言われるのも、路郎先生の膝下で長く訓陶を受けられたからだと思いますが、確かに日本の文字や言葉は、難かしいと思います。(本社句会の柳話から)

前号訂正——心得て仲居は梅の枝を折り



中島生々庵選

吹田市 岡田某人

老夫婦チマチマと居て座敷 秋

夏果てぬやけくそじみてカンナ咲く

残暑なお去り難くそろ瘦せてそろ

向日葵の花弁数える如く蜂

どの峯も雲をおさめて秋の色

竹原市 森井菁居

不死身めくサボテンにして水に負け

も少しの生命だ鈴虫鳴き給え

飾りものめいてマイカー磨かれる

豚のプライドよ体臭をはばからず

破られてから蜘蛛の巣の補強策

大阪市 福井野迷路

又どうぞうっかり云えぬ医者稼業

虎なみにせめて皮でも残さんか

もし俺の遺品微笑のデスマスク

万博は綿菓子のない村祭り

戸締りは心の方があいたまま

大阪市 大坂形水

どっちもどっち阿呆らしいもめ話

亀勝った現代版というハナシ

大阪の穴場博多で聞いてくる

お旺んな老人が寄る敬老日

齢ばれて老人組みへ入れられる

奈良県 石倉旅風

亡妻に会いに行く日の髪を刈り(八・一三)

朝顔の可憐に晩の水をやり

たばこ屋が喫い過ぎですよと言うて呉れ

盆栽のごとき一句にしてしまひ
ほっとして座れば薄茶手に届き

出雲市 尼 緑之助

明日のためなどと寝酒を賛美する

出来損いの湯吞よ茶も酒も

弱いなあと寝酒の度を超える

大声になって夫の権利行使する

日御崎にて

灯台の夕陽神話を抱きよせる

倉敷市 野田 素身郎

雷鳴へやっぱり女だった妻

台風へうちのアンテナだけ健気

二学期に期待をかけてみるも親

以下略の中の一人に僕がいる

先輩の端くれにいて寄付がくる

大阪市 山川 阿茶

恋女房染分手綱（二句）

桶箱の裾で三吉駄々をこね

重の井はドライに打ちきる母心

人間の五欲の角も長が短か

お不動さんへ万博帰えりが水をかけ

鬼子母神顔まけしそんな母がおり

岡山県 浜田 久米雄

吉報の電話違った音で鳴り

人生の坂へ汗拭く間を見つて

長生きの倅せと知る秋の酒

見ぬ振りをしてはしつけ許されず

今晚の主役散髪して出かけ

倉敷市 本田 恵二朗

これしきの波を笹舟よけきれず

週刊誌お前は世相の屑籠だ

ドンファンがほくそ笑んだぞあぶないぞ

万物の霊長蠅取紙にひっかかり

にっこりと女教師笛で叱ってる

豊中市 戸田 古方

万国博雑吟（五句）

太陽の塔孫も憶えているだろう

生国を名乗って行列まだつづき

パピリオンの見方がつかめないまま

ひとりよがりみたいこの展示かて

万博のムードそれでいて楽し

青森市 工藤 甲吉

心頭滅却ができない汗をふき

石に腰据えて貧乏考える

釣り糸を垂れて人間陶冶する

一人泣けば一人が笑う双生児

なんだこれ位とオキシフル塗られ

大阪市 木村水洞

地球が減びぬ限り貧富の差

歩行器であばれる孫が頼もしく

夫婦喧嘩ない日の長屋落ちつかず

安土城址

信長の覇業空しく蟬しぐれ

北丹鉄道

風景は明治のままの赤字線

大阪市 正本水客

悲しきまでに晴れてる空に秋を見ず

髪をすくときの無心を美しと

さらし葱そうめんの白かぎりなく

言い切ってハンドバッグにある構え

万博も終ったわネとそれっきり

京都府 大鶴喜由

姿見の中に殿御を呼び入れる

そねむより俺に可能な職を選び

追憶は月見の夜の遠出騒

あと百米でお別れをする手を握り

気心がまだ知れぬのに嫁になれ

大阪市 金井文秋

大都市の真ん中にある過疎のビル

拝まれて気のすまない判を押し

子守でもする気で家庭教師居る

こんなのを好きもいるからアイシヤドウ

誤字なんぼ直されてても気が付かず

大阪市 橘高薫風

松島のふた月たちてなつかしや

藤巻昌子さんへ

婚を約し月へ帰れぬかぐや姫

焼ける胃と如何なし難し想夫恋

ワンマンも胃のたかぶりを持て余す

枕抱いて胃をかばえるか虫を聞くか

堺市 吉田圭井堂

かかる世に孝養と云う字を見つけ

2Dに住んで城主のつもりなり

吞舟の魚は疎で洩れ蜜で洩れ

善人がハッピーエンドと限らない

一浪に懲りて徹夜の日が続き

高槻市 傍島静馬

肩書が取れたらゲスト云うて来ず

お兄いさんにされてお預けくうている

利子要らん云われて女房考える

取柄ない男同士で気焰あげ

ホトケ心出して集金勤まらず

大阪市 児島与呂志

知らん間に二十二年も夫婦なり

夏の風邪長女やっぱりお歳頃

やけくそのように夏の陽背に出かけ

腹立てていてもやっぱりゆずり合う

陽やけた顔が目立つ地下に降り

高知市 川竹松風

失業へそろそろ妻の風当り

恋人に犬もなついて恋実る

冗談を冗談と聞けぬ日の機嫌

晩酌へつき合うように妻は編み

台風十号

人災と云う汚染の水びたし

大阪市 有信新之助

領収書要るかと肚をのぞかれる

安全ベルト電気椅子のようにかけ

右側を通れと日陰にみちびかれ

信州行

山裾を展げて木曽路に見送られ

一病息災胃袋がぶらさがり

高槻市 福田丁路

自棄酒が飲めず口惜しさ抱いて寝る

革命を叫ぶ童顔孫に似る

迷い子を抱いた婦警の天使めき
お迎えをせかしみ仏困らせる

下関市 石川侃流洞

サービスの過剰へ野心見てしまい

返信の切手が書かず筆不精

さざ波へ明月伸びたり縮んだり

いい便り切手が甘い舌の先

島根県 藤井明朗

豊作ありがたし愚痴は引っこめる

万博が済めば暮らしのひずみくる

金のある方に押される久し振り

図星さされて無口の目の笑い

門真市 福島鉄児

盃を重ねて妥協が見出せず

停退のあとからどっとくる疲れ

お前は倅せよ早よう死んで

金策の戻りを通夜の席に座し

岡山県 大森娛句楽

廃道の地蔵をおしむ曲り角

行水で一汗流すはね釣瓶

老化した庭にいたわる萩の花

ペンギンのブルジョア気取る悠揚さ

愛媛県 渡辺曉童

和服きて行けば反骨だと見られ

真ッ赤な夕陽日本のあすを疑わず

銀婚すぎた以心伝心

有名税千円三口たのまれる

倉吉市 奥谷弘朗

神様という凡人の隠れみの

寛容と忍耐父さんとまだ呼ばず

安住の場へ恵まれぬままに老い

方便の嘘が言えないお人好し

笠岡市 木山遠二

田圃へも行かず万博へも行かず

百姓はまだ一粒をだいがり

捨鉢になったか赤い顔をせず

万博で押されて子供得心し

東大阪市 久米奈良子

南無大師写経の汗をみそなわす

隠れミノ私ひとりが知る悲哀

倅せも多情の谷のせせらぎよ

夏草の茂みに秋をすだくなり

大阪市 天正千梢

感情の整頓淡泊な愛

鼻もちならぬ光明ふりかざし

自由に背き欲望を制限し

狂人ものせて地球は回転し

米子市 林瑞枝

云い勝って愛薄らいた瞳がかえり

愛の鞭小出しに使うも義理の仲

心澄むわが子の助言教えられ

苦痛もう忘れて下を産む支度

出雲市 野村岬月

おもろない顔で結構貯めており

つかまらぬだけさ十年無事故なり

三朝にて

勿体なくも深夜の湯がこぼれ

人の汗だからゴルフだ週末だ

桜井市 岩本雀踊子

まね事の孝行父に酒をつぐ

荒っぽい言葉女が生きて行く

心の渴きへ息をととのえる

謝まっていれば事すむ我家なり

宇部市 平田実男

あどけない遺児がおもちゃにしている数珠

淋みしそこに犬も主人の喪に服し

親までが玉の輿だと思ってい

言訳けの男それから小さく見え

大阪市 中川滋雀

いっそ朱に混れば楽な掌を見つめ
未亡人だからきれいな嘘もつき

万障繰合せて来たら日が違い

立ち寄るにしても手みやげ要る迷い

下関市 桜川 不水

恩給に端株が少こうしある暮らし
変態も三分どころは睦まじい

何が気に召さぬか柿がまた落ちた

友人に男の孫誕生

男の子げんこバンザイして生れ

今治市 越智 一水

秋の夜を無駄にせぬのも女なり

日曜日妻にやんわり使われる

針金がさびて来た頃菊は咲き

愛してるからこそ夫をわるくいう

神戸市 仲 どんたく

身摺り減らすように秋の夜の虫の恋

買っても買っても宝くじ

万博のメイドインジャパンかき氷

グロッキー積んで万博終電車

呉市 林野 甦光

ちっぽけな主義を誇りにして若さ

蝶々がすいすいと秋へ消え

ホステスの訛を真似る酔うている
マダム張切って見てもお客は僕一人

竹原市 山内 静水

十坪の敷地方角言うとれず

善は急げ今日が大安

山紫水明四万都市の物価高

見合を重ね長男がいとおしく

倉敷市 水粉 千翁

走り去るときあきらめの恋でなし

泥沼で貝はプライド崩さない

ほころびて袋は無理へ妥協せず

腕組んでわが人生のページ繰る

岡山県 直原 七面山

一字も読めぬ軸に感心

つなぎの恋の相手に選ばれ

その照れ臭さを隠す早口

苦が苦にならぬ恋の道行き

八尾市 高杉 鬼遊

お伺いたててタクシীর客となる

愚かなる人目にさらす月の石

背のチャック頼めば男うるさがり

西成で社長と呼ばれバナナ買う

倉敷市 小野 克枝

焦点が子にしばらくられた調停室

結婚は雲に乗ってるとの違い

ここまですと理性パッチリ目を醒まし

だまされても妻の割烹着は白

兵庫県 遠山可住

ブロックの塀で退職金囲う

わたしかて女ですワと少し酔い

表彰の一人を囲むあほらしさ

魚屋の降りた座席へ躊躇する

岡山県 坂井三葉

コンテナー今日は左せんの荷をまとめ

定年の嬉び仮面をぬぐ安堵

子守唄上手に歌える姑で無事

濡れて来た女の瞳信じよう

美禰市 安平次弘道

米過剰されど案山子に用があり

地鎮祭科学時代の尾軀骨

裁判も辞さぬ強気が金に負け

虫供養デパート昆虫でも儲け

鳥取県 森田布堂

火の元は半分焼けた風の向き

結ばれた顔を鳥居がくぐらせる

闇の灯の深さを覗く汽車の窓

過去となる一と日を惜しむ句をひねり

富田林市 岩田美代

良い事がありそで虫にタクト振る

喝采のない過去だからふり向かず

アイヌ部落にて

商魂のアイヌへ熊の眸がうつろ

血統書持つ酋長で頭が高い

倉敷市 小幡里風

古い傷疼く漁火見て飽かず

濡れ衣を着せられ茶漬に音がない

心にもない事云うて負けている

真直ぐに歩いて故郷の山や川

東大阪市 竹中綾女

集印帖忘れて寺を廻る悔い

落柿舎の芭蕉の句碑を夫と読む

小倉山借景にした寺めぐる

妓王寺の小さき庵に人絶えず

下関市 志賀木石

台風目の静けさを鳴く蛙

台風下電気けなげに点いており

席さがす老の視線に目をそらし

孫のような交通巡査に叱られる

和歌山市 垂井葵水

鬼瓦に睨まれて蟬鳴き止まず

ためらった蜘蛛が律義に網補修

爪染めて小さな依怙地はつてみる

さりげなく肩に手を置き祝われる

笠岡市 松本忠三

腰掛けの積りでしたと辞めて行き

空席を確保食券買いに行き

老人の日に老社長ご出勤

蚊や蠅が残暑酷しく飛び廻り

竹原市 小島蘭幸

セールスとしてひと言を控えとく

眼に映るものみな炎えている闘志

今俺が死んだら何が残るやら

そんなことだろうとわろてくれました

鳥取県 川崎秋女

その時季を違えず雑草生えて来る

残暑なお続けど海の秋の色

濡れるなら大手を振って濡れてゆこ

梨に明け梨の話題でくれる里

堺市 高橋千万子

鍵つ子と犬の対話は母の事

不快指数やれやれ台風の目が動く

あこがれたポストに雑音多すぎる

くしゃみしてそこまで秋の来たを知る

広島県 高橋鬼焼

秋風へまだ歩けない松葉杖

丘けずるブルドーザーへ赤とんぼ

黒帯の後姿にあるゆとり

歩けたらいいなと思う土の色

愛媛県 村上旭童

暑中見舞もらったままに秋になり

水引けば宵から雨になる田ん圃

台風の中で新築考える

若さとはいいな手術の傷のいえ

姫路市 村上春巳

年頃が居るを呉服屋見逃がさず

本物が来る頃台風慣れをして

鹿にさえ小馬鹿にされた握り飯

秋風を尼僧の胸で受けとめる

大阪府 神谷凡九郎

人間に嘘を教えた粧いと云う着物

自分に遠ざかるように三面鏡と対決し

一皮むけばみんなおんなじだったのが嬉しい

寿命というものありて人踊る

笠岡市 木山要次

体調の乱れか朝も腹が立ち

番犬を飼うほど貯めて淋しけり

不快指数時計も二三日止まり

間違つて居たとも云えぬ意地もあり

竹原市 時 広 一 路

合理化へ揺れてきだしたマイペース

包まれた棘をちらりと感じさせ

ローカル線のんびり走るように見え

マッチ箱また空にして子の花火

島根県 小 砂 白 汀

そんな日は間違い電話までからみ

アドバイスしてから溝が深くなり

あの花の種とは見えぬケシ坊主

一坪は一坪に似合う枝になり

岸和田市 葛 城 伊 三 郎

人垣を覗けば乞食銭をよみ

剥ぎ取りをして儲かった顔でおり

教典を読んで昔の傷に触れ

借金の居留守を孫に暴らされて

奈良県 草 深 醉 升

まだ値上げせぬのと客が不思議がり

何糞と思えどガタの来た軀

秋の蚊は特攻隊に似て哀れ

職安もぼちぼち探せと匙を投げ

芦屋市 丸 川 初 甫

道草の勤め停年までつづき

泣いた目をなぐさめられてまた涙

糸口になるとも知らずメモをかき

一生の願い軽く手を合わせ

大阪市 室 谷 徹 舟

どちらでも良いのでみんな委しとき

強盗を見破れなんだ自動ドアー

地下街で方向音痴を笑われず

当り前の事を新聞書きたてる

八尾市 香 川 醉 々

拝啓と母校も寄付に余念なく

一日を飲みほすように大ジョッキ

判貫うついでにネクタイはめておき

結論をボスが示して閉会し

堺市 藤 井 一 二 三

小松市交歓句会（一句）

手を握り肩叩かせた加賀の酒

汚職記事皆有能を惜しまれる

悪友ですと妻へ胸張る友を持ち

正直過ぎる仲人で話したもつれ

和歌山市 西 尾 公 作

子沢山天井日々に低くなり

名案に妻家計簿の赤字指す
赤飯にわが定年をはげまされ
美しい夢を万博残し行き

倉敷市 竹内翁童

信念を世間様に曲げられる
前歴があるから一番に疑われ
亡母に似た入道雲に手を合わせ
もう少し居てほしいのに見舞客

松江市 中川晃男

エキスポ大繁昌記

パビリオン駆足で世界半周し
公害もなき華やかな未来都市
万博終り日本の秋深まる

京都市 都倉求芽

美しく咲くから花は手折られる
堀の雨蓮の白さえたじろぎぬ
プラットに埃りまきあげパンタロン

札幌市 平野青夜

弥次郎兵衛になれば世の中暮らし良い
鍋料理ひもじい顔が寄って来る
ろれつちと怪しく童顔光り出す

岡山県 池田古心
小声にもトゲあり懊悩してる妻

遅刻して協議事項に喰い下り
いい爺ちゃんに成るには矢張り金がいり

岡山県 横山一声

町議選挙
演説が下手でこそこそ票集め
五十の手習い先生手こずらせ
家こわしねずみはちゃんと逃げており

藤井寺市 西いわを

藤棚の逆光線に佇たされる
都合よいとこで神様引き出され
恥ずかしさ足の裏まで赤くなり

松江市 小林孤呂二

売られてしまえばいのち短かい甲虫
仕手にはなれず脇を心える
秋へ全快千羽鶴は色褪せる

伊丹市 小川静観堂

日本の四季いろいろ咲かせ百八十三日
セールスは孫へ美田を買えという
虫が啼く遺影の妻と茶をのめば

兵庫県 大江秋月

伊勢参宮をして
千年の杉が歴史を知って立つ
十人のこどもが囲む杉の齡

休憩所の茶代も初穂料と言う

奈良市 宮口 笛生

後手後手となる対策の川が死に
学のない私なりの人生観

名古屋観光

バスガイドな一もきやあーもと楽しませ

平田市 久家代 仕男

おろおろとむしん伏し目に口をきく

慰めの言葉もくれて疑惑の目

嫉心まだ去らず運針遅遅として

高槻市 山田 季 賛

万博でにぎわう駅の汚れよう

朝寝した母昼弁当代をくれ

工事場におしめりが有り通り雨

守口市 羽原 静 歩

マイペースサンマに縁のない暮し

べールしたその反面の人間味

預金する汗は小さくたたまれて

大阪市 河井 庸 佑

両方を納得させる案を立て

難問へこんどは横からあたつてみ

虎の威を借った狐と今わかり

鳥取県 清水 一 保

二級酒を飲んで一級並に酔い

命有る限りを鳴いて蟬の秋

文机へ青春の跡娘が果立ち

尼崎市 高津 徹 也

菊日和耐病癒えし祖母の杖

冬日和大樹年輪また一つ

失いしまち針みつけ夜なべ終う

石川県 馬場 魚 山

シーズンを過ぎた西瓜を割る残暑

松葉杖黙々として主につかえ

遠雷もどこかえ消えた蟬時雨

笠岡市 出原 真 奇

日曜の朝寝を猫に起こされる

愚痴云うて女ちよこちよ帰りゆく

政府に申し訳ない程稲が出来

奈良県 西辻 竹 青

七十に近寄り空白懺悔する

よみなれぬ居所ふりがな念がいり

久方に逢えば妓もふけて居り

大阪市 今西 章 雅

順番はここにも有料養老院

責任は持ちそうもない口達者

カラーテレビ安なりそうと未だ待つ気

兵庫県 河原みのる

うわ言のついでに一ト言云うたろか
眠られぬ夜僕の葬式画いてみ
ハッキリと今朝から秋になりました

倉敷市 藤井春日

脊の蠅をピシヤリとやって叱られる
サンマもう庶民を捨てて逃げる気か
やけ酒と脊中合せの祝酒

大阪市 宮尾あいき

名月も待たずすすきは刈り取られ
籠の虫はかない恋を知らず鳴く
何処で産れたのか都心の赤トンボ

米子市 八木千代

万博へ二度インテリの箔をつけ
ポンポンと落せ急所は避けている
秋冷の候 知能指数を取り戻す

島根県 堀江正朗

血圧が気になる秋のお茶話
ビールだけあれば事足る誕生日
折れそうで折れない老の腕つぶし

大阪市 西川誓二

還暦の心に通う地藏盆
夕食に働き終えた顔揃う

終り近い万国博

日本庭園でしみじみ秋の色を憩う

鹿児島市 土岐トク子

大輪を咲かせ隣人よろこばせ
明日はもう出発出稼ぎの子守唄
ビーズ玉編んで孫からプレゼント

貝塚市 野坂つき子

乱れてる心を花に見ぬかれる
土曜日の並木へ二人ずつ消える
気苦勞は母に任せてまだ嫁かず

久留米市 永松道雄

国道を避けて学童の遠回り
無駄づかい夫にブレーキ要る旅行
開拓の河原がみのる秋となり

岡山県 出原敬一

わが家ではなかった団地のいい匂い
お向いもしごかれていた日曜日
渡り鳥一声残し遠ざかる

岡山市 川端柳子

想い出のピンク色して夕暮れる
わるびれぬ顔で公害地の雑草
吹く風のためらい勝ちに夏惜しみ

東大阪市 竹中肖二

去來の墓青柿二ツ供えあり

手を入れぬ朝顔の方が早く咲き

淋しさは敬老の日に犒われ

大阪市 宮地 双 楽

古稀すぎてなお雲水の気魄湧く

逆さまの富士もヘドロにくやしがり

未練ある方が振り向く歩道橋

和歌山市 野村 太茂 津

待ちぼうけ小川に小石蹴り込んだ

山に縄張り松茸のありか知り

ビルの谷それでもやはり秋の風

和歌山市 土 谷 城 石

伸びすぎる日本へほしい引手綱

小休止求め用足すバスの旅

麻痺の子も同じ赤飯祝うた日

鳥取県 谷 無 閑

聳養子刺身のつまとしてつかえ

天網恢々疎にして汚職

葬儀屋の葬儀案外地味に出し

小松市 四 方 天 弘 美

乗り替えはしつこい程に念を押し

バス待ちは行儀正しい木蔭添い

クーラーを入れて暖房具展示会

尼崎市 長谷川 三 司

雨近い風が病室吹き抜ける

冗談も言えて病人つつがなし

熊本県 有 働 芳 仙

日本の空に酸素が切れかかり

万博の灯も消えこおろぎ鳴きはじめ

松江市 柳 楽 鶴 丸

女の話題野菜の高いこと

握手した手が小さいく震るえてた

姫路市 隠 岐 不 酔

税務署に見せようだけの契約書

礼状に家宝にするとうまく書き

八尾市 古 川 鶴 声

明日もまた暑いと月が冴えて見え

掛け茶屋を揺さぶる如く滝の音

神戸市 小 浜 牧 人

細長く生きて主治医に逆らわず

虫を聞く初老夫婦の部屋となり

大阪市 福 井 多 蘭 子

名医なれど無口の主治医頼りなし

見合いの席へ母は娘の髪すいてやり

堺市 伏 見 茂 美

灯りつけ又消してもみるもの思い

飼主の都合で散歩も早いこと

東京都 増田 次章

颱風のプレゼント東京の碧い空

超高層ビル孤独のかげがかくせない

自選

名古屋 吉田 水車

万博ですっと行けたはレストラン

冷房につい誘われて無駄費い

にっぽんに路があつたか歩行者天国

オイランのそれに似て来るハイヒール

高槻市 若柳 潮花

鈴虫も籠に馴れたか鳴きはじめ

お座敷へ人形のような裾をひき

見送りへ答える首を出す車窓

誰れ憎む瞳かうれいなぞ見せて

大阪市 不二田 一三夫

やんわりと堅いお人と封じ込み

自分だけ悲劇のヒロインだと 女

寄席 二句

出世とは五座の櫓へ城を持ち

十銭の頃がなつかし奇人たち

★

若本 多久志

不遜にも社長としての訓示する

ドック入り老い深き身に虫の声

敬老の日とは佗びしき祝日よ

朝の来ぬ夜はなし悔かみしめる

衣食足りミニは膝上一〇センチ

北川 春巢

下車をする用意煙草も出しておき

社は斜陽テニスコートも売る噂

新米と古古米分かる舌を持ち

七回忌親戚年を尋ね合い

ご自愛を祈り自愛はしておらず

西尾 栞

囲まれて母ちゃんまりと月見する

名月や素直な言葉返つて来

名月や重なる団地古城めき

テレビ消して月の出を待つ二人たり

月の出をしらす老婆若やぎぬ

菊沢 小松園

星になりたい星は黙って輝ける

雑草の役だ目立ってはならず

老醜をむきだす鏡に遠くいる

鰯雲都会に秋を見附けたり

言訳は何うにでも附くベルを押し

川傍柳 初篇研究

(八十八)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

61 茶屋をたをしたで御殿山へ廻る

五 英

岡崎 浅黄裏？ これもわかったようではない。この茶屋は高輪の水茶屋か。しかし、それを「たをした」ので、御殿山へ廻るとはどういうことだろう。

前田 茶屋でかりていた飲代をふみたおした（払わない）ので、御殿山の花でも見ようといふ意味であろうか。

藤井 前田説に賛としておくが自信がない。川端 「茶屋をたおした」がわからない。

浅黄裏をけなしているものか。

高須 不解。わからぬ句があると時間がかかってかなわぬ。この句のために一日のびた。

丸 前田説賛。ふみたおした茶屋の前を通れず、心ならずも御殿山に回って憂さ晴らしをするのであろう。「江戸にさしつかえ伏見を廻るなり」（天元宮）などやや似た心境。品川は江戸町に代る伏見町がな

いので御殿山ということになった。

岡田 これは高輪から八つ山（現在の品川駅前の手前から八つ山橋あたり）にズラリと並んでいた品川の茶屋のこと。その払いをふみ倒したので通れず、茶屋の手前の横丁から坂をのぼり、毛利侯邸の前を通って御殿山に出て、すなわち大廻りをして品川の妓楼へ……という句。御殿山は桜の名所だが、この句は花見とは関係ない。

62 かたき討小金の宿で形をかへ

船 汀

岡崎 仇討ちに旅立つため虚無僧の装いに身をやつす。下総の東葛飾郡小金井に普化宗本山の金竜山一月寺があった。親兄弟などの仇討ちのため虚無僧になるには、普化宗本山で入門、印可をもらわなければならなかった。

高須 いやにすら詠んでいて、見本みたような句。

丸 賛。

岡田 賛。（ただし、江戸浅草に一月寺の支所があり、そこでも印下を与えたことを付記しておく。）

63 子にあたまちよとたたいてしらん顔

一 甫

岡崎 子供をからかってみる——親の愛撫である。

藤井 親とは限らずよくあるシーン。よその子でもよいだろう。愛撫よりも軽いイタツラ。

高須 愛撫的いたすら。うしろから行ってそとたたいて、横をむいて知らん顔をする。子供が向うを向くと、またちよいとたく。平凡にそのまま詠んでいるのに情景ホウフツで佳句。好きな句。

丸 藤井説のように見えている。これも子煩悩。

岡田 同。

64 三会目帯のとかれぬ気の毒さ 一 甫
岡崎 三回目ともなれば、おいらんも初め

て打ちつけて「帯紐をといて付き合ふ三会目」(一八・40)のはずなのに、帯が解かれぬというの、折り悪しく生理中だからである。

清「これは口実ではなく事実解けない情態で、運がわるいとあきらめなければならぬい。

藤井「生理中とは知らなかった。御明解。高須「帯は解かぬが客には事情を話して、周囲で心を使って欲待する。この「気の毒さ」は、客はもちろんだが、当の遊女にもかかっている。

丸・岡田「礎稿賛。

645 目を眠ツてる内腹掛をよます

一 甫

岡崎「雷をまねて腹掛けやとさせ(一・2)のように、子供は腹掛けなどしたがらぬもの。だから――。

清「子供をおだてたり、だましたりしながらの動作。

藤井「賛。「ママが目をつぶっているうちに、よい子はズロースはきますよ」今でも

あるシーン。

川端「賛。母親同士の会話か。

高須「この作者一甫、よく子供の句をつくる。家庭においてよい父親であったことと思ふ。「しめします」は「しめましよう」と同じ使い方。

丸「賛。子供に対する母親のことば。

岡田「同。

646 十二日立ツと金喰ひ娘なり

眠 狐

岡崎「十人並みのキリヲウの娘でも、ひとたび痘瘡を病めば持参金をつけないと、貰い手が無いアバタ面になる。さて十二日というのは痘瘡の療養期。痘瘡の病状は水腫、本膿、山上げの三期にわかれて、各三日を要した。順調に経過すると、さらに三日つまり発病してから十二日たつと、はじめてカサブタがとれる、そこで米のとき汁に酒をまぜた湯を紅手拭にひたして軽く拭いたは笹の葉にひたして振りかけると、アトがかたまるといわれた。

清「賛。持参金つきになる娘もあれば、離縁される嫁もある。

むこい事さ、湯がすすむと去ってやり

二三・24

高須「持参金つきでなければ嫁に行かれぬ娘となる、ということは、嫁にも行けず家で我儘をいう娘ともなったわけで、どっちにしても「金喰ひ娘」になったのである。

丸「礎稿賛。「ハシカは命さだめ、ホウソウは器量さだめ」といわれた。重いホウソウを患った娘。

岡田「賛。

647 むこくおしつけて十文上ヶましやう

一 甫

岡崎「不解。誰が何を押しつけたかシチュエーションの見当がつかずお手上げ。

前田「ふかく掘り下げずに、十二・三文か

もつとそれ以上のものを値切る場面。安値にむこくおしつけて、十文あげましようというところ、売値にかけ値の多い場合よくやる手である。

川端「ひやかし半分に大巾に値切ってみたら、相手も意地になって「江戸っ子だ、気前よく……」と安値を承知したので、今更ことわるわけにもいかず「あげましよう」と「むこく」を対比したのであろう。

高須「「十文あげよう」と「おしつける」のが「むごい」とは何か？ 高い物を安く値切って買ひにしても、その表現が理解できない。何か当時の事物でそんなものはないか。

丸「不解。全くの駄労働であるが「ひやうきんにするなと姉にしぼりつけ」(八12)

「姉娘しめしを当ててさづけられ」(二・29)のような場合「十文あげましよう」は

通信にご投句に

川柳塔柳箋

一冊 六五円 送料 三五円

お小遣ではあるまいかと考えている。むごくの表現が気になる。

岡田「小生も丸先生のように、飛びまわって遊びたい女の子に、むりに子守をさせる句と解していた。

三十年 二月号

社会党

意地ッぱりまだまだ別居続きそう
旅馴れて駅弁この駅に決め

三十年 三月号

解散に皮算用で国へ去に
又あいつ供託金をとられに出

文字の太さまでも代議士かつぐなり
保守党は二号のところで吞ましとき

気前よくジッパー引いて落選し
代議士も老いては万年床で死に

父一人公明選挙から外ずれ



大正12年5月、鳴尾時代の路郎、豊乃先生
「君見たまへ渡邊草が伸びている」は鳴尾
時代の作品である。

「旅人」以後の

麻生路郎作品

| 4 |

二次会へ女医はあっさり失礼し
停年へ正直者であっただけ

奥さんの方へインタビューの春

帰国してそれからりんきするばかり

あのボスが顔をきかした初日なり

紅一点のわたしわたしへ目をあつめ

三十年 四月号

イニシャルはあるがアメリカ中古品

今年こそかたづける気の娘が居

三十年 五月号

雨の吉野にて (三句)

哀史聴くにふさわし吉野降りしきり

落人のように吉野は雨となり

偽物でもよしよし花の宿の軸

篠山にて（二句）

夜桜に二次会まではゆくつもり

わらじ酒さらばさらばとバスが出る

阿茶さんの嚴父七回忌に

七回忌在ませしころの花も咲く

長谷川悟路博士を悼む

君あらず春もさびしきものと知る

落選をしてもお世辞の中に立ち

三十年 六月号

河盛安之介氏の堺市長に当選を祝して

人により ここに芽出度き市長の座

愛に果てなし みおつくしの鐘となり

夫のものを仕立直して着るも年

まああがれあがれは名誉初段なり

晩年をまだ随筆に生きんとす

急逝を妓がいつち早く知り

保証した方の背広が古かった

養生と別にこどもはこさえてる

あの色気あれで養生してるのか

三十年 七月号

銀閣寺にて

おおそうか ここも拝観料が要り

京言葉 あれでおこっているのなり

茶漬でもいいさと逢いに行く身なり

老妻のお供 三本立てにする

アドビルの上をすべった貸ボート

八月号にはなし

三十年 九月号

山雨楼を悼む（五句）

片腕を千切られた思いして焼香す

川柳^{ほとけ} 蒼白き月に入りしか

オオ山雨楼と呼べば一ト筋のけむり

しかし奥さんという声をもう聞けず

絶筆も一糸乱れぬ君なりし

生々庵居の酒供養に招かれて（二句）

孫がもういけますという酒供養

酒供養ほとけも席に出て来そう

（清水 白柳）

先生とはなんぞや

東 野 大 八

このごろ岐阜市柳ヶ瀬の飲み屋で、先生、センセとよくいわれる。ローカルのマスコミ関係に時折使われることからきているようだが、川柳界でも例外ではない。

二十歳台で初当選したさる代議士が、国会へ初登場したとき、一番うれしかったのは、先生といわれた一瞬だったと述べた。岐阜県議会の事務局も同様である。初当選した田舎の農場役員が行きつけの飲み屋で、イーサマなどといつものデンで口にする女中へ「おい先生と呼ぶんだ、いいか、おれは県議員なんだぞ、センセイ、わかったな」とあたり見回したしなめているのをトイレからすき見して私

(センセ、やつとるな)
と苦笑したことである。

先生も、カタカナになると格が落ちる。質的にもヤッコさんと同意語になる。高校出たての私のムスメが保育園の保育の資格を

とり初出勤したらその日から先生になった。どんなグアイだ、というと、ベツに……と無感動である。二十歳前の彼女は、先生なる言葉の量感にはまことにウトかったのである。

川柳界では、房川素生さんとの初対面について先生といったら

「それだけはやめとくなはれ、たかが菓子屋の職人に……」

とボヤかれた。私の叔父などは、俳句半世紀の八十翁の宗匠なので、先生も甲羅を経てイタにがついているが、二十歳台の若い俳人たちの間でも、平気で先生という呼称が交流している。そのてんたんさに感心したら叔父はいつた。

「——先生といわれるほどのバカでなし——という川柳があるだろう。だから先生、先生とたたまづられてイイ気になるほどバカではない、という自意識が川柳家は強い。それだけに余計川柳家は気にするんだよ、そんな先生

にコダワルようでは川柳界もタカが知れてる」

大陸に住んでたころ、中国人はすべて日本人は「先生」扱いであつた。別に尊厳をこめていってわけのものではない。そういっておけば双方ともに無難だからである。

一体、先生とは何か、中国人がでてきたので、例によってセンサク癖を発揮することにした。

先生は、中国の古典から存在する。孔子、孟子、管子などの書かれたものにはふんだんに出てくる。漢の賈誼は、先生とは先醒であるといっている。

——先生とは、醒めているようなもの、学生とは酔っているようなものだ。「生」がみな酔っているのにひとりだけ醒めている。先生はまた醒生ともいう。(意林||風俗通)

孔子が宰我にむかつて、お前はそれをきいてどうするのか、先生にも答えようがないよ

(載徳川五帝徳篇)

列子に向つて坐が「あなたの先生は：」

(列子Ⅱ黄帝篇)

墨子の弟子は、墨子先生と呼び、孟子の弟子が、先生はどうしてそのようなことを——と言つたりしている。漢の趙起は、先生とは高齡者なり、としている。鄭玄の「礼記」註釈にも「高齡の人で学問を教える人」となっている。しかし、唐の顔史古の「急就章」の註釈によると「先生とは齡は不問老生の人」としている。

「大載礼」の曾子立事編にはこうある。

「年少の時に読書せず、壮年になつても論議せず、年老いて教導しないようなのは先生といわない。」

孔子は三十歳前後に弟子千人を持った。屈原は、年は若くも師長とすべし、故に先生なりと「楚辞」その他でいっている。

また別口では、先生の下をとつて「先」だけで先生をまかしたのもある。「史記」「漢書」に多い。これについて宋の宋祁は、生のうえに先の字を添えるのが當を得ている、と先生派だ。清の俞生は、経書を収めればみな生であつて経生という、学校に入れば学生といひ、門下であれば門生という、故に師は先生だ、と書いている。(癸巳存稿)

先生はまた、縁者の中でも使われる。莊子の「讓王篇」では、列子の妻は列子を先生と呼び、劉向の「烈女伝」では、亭主を妻が先生と尊称している例を書いている。また武帝が東方朔に、先生は起立して自己批判すべき

だと漢書にある。

先生は、宗教、易占の師にあたるものにもさかんに使われている。道教の「異人録」には、盜賊同志の中にも先生の敬称があり、めくらの女を女先といつたりしている。五代の「旧唐書」では、養徳邸は名声も実績も世にあらわれ先生と追号した、というものもある。「宋史」の謝絳伝には

「近年ふらちなものどもが、陰陽五行の理をあげつらい、先生だとか処士だとか自称し、頭巾もつけず、短い褐を着ながら、内は朝廷の権力と結びつき、外は県や州に出入して：とある。この辺の先生は格が極上らしい。」

このように「先生」をさぐつていくと、スーパーマーケットの菓子袋ぐらい先生のふくろいりがごろごろしている。通読していくと要するに先生とは、(道)にめざめて先に行く人というのが定義らしい。いわば、尊称なのであるから、どんな野郎でも、コレワと思えば先生というパーのママダの感覚でよろしいことになる。学校関係の人々なら適言だし、医者もびつたり、だがこういう人々をふくめて議員や絵かきや文化人らしきものの酔っぱらいは、実質的にはもはや先生とはいえないリクツになる。何もめざめているものがなくなるからである。酔っぱらいを先生と呼ぶのはオカシイ。先生に対し

—後生おそるべし—

というのがある。漢文にある。後世畏るべし、いずくんぞ来者の今にしかざるを知らんや、四十、五十にして聞ゆるなきは、これま

た畏るに足らざるなり。(論語)

これを意識すると、若い者はこわい、どうして将来がイマ以上に進歩しないといえようか、もつとも四十、五十になって注目されないようなら、格別コワクはないが：ということになる。

よく「今どきの若いものは」と先生が言いたがる。カチンとくる後生！考えてみれば、嘆く先生ももはや限界がきている以上、未知数の可能性をもつ若いもんには、リクツからしてかなわない立場にあるわけで、あまり先生はいらぬことをいわない方が無事である。その先生だつて、どこの馬の骨が分らぬ徒輩によう先生——といわれればハラが立つのである。ケナスのとホメルのと、先生ほど二律背反の要素をもつコトバはないのであるから、先生といわれても別に気にすることはないである。川柳人はすべからず、先生、センセにこたわらぬを徳性とすべきである。コダワル人が多いので一言。

★

川柳塔社常任理事会

10月3日、本社階上で常任理事会が開かれた。あすに迫つた同人総会と二賞発表という理事会だったが、多久志、好郎、栞、白柳諸氏欠席で(病氣その他)諸事の打ち合わせはできなかつた。

来年の路郎忌の会場と開催日が内定。新年号に全貌を発表。

出席—戸田古方・中島生々庵・大坂形水・菊沢小松園・橋高薫風・不田一三夫諸氏。

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

後悔と焦りをつなぎ明日を組む

垂井葵水

この作家が今古い殻を破り一歩でも前進しようとする焦りにも似た熱意を以て作句に取組んでいる一人である。それがこの句にも出ているし、新しい表現の妙にうかがわれている。

蟬鳴いて山おりきつた足になる

正本水客

凡そ私と全くちがった句風を持ち、しかもいつも魅せられている作家である。蟬―懸崖―山百合―雄しべ―そして風と自然の中に川柳を詠み、川柳の幅の広さを教えてくれるのをいつも感じる。こういう句もわれわれに味読すべきだと思う。

売上げを何度も数え売れない日

金井文秋

本屋を営んでいられるこの作者の実感として心に打つものがある。文秋氏の身辺句には定評があるが、この句もその一つであり、初心者の作句にはまず身辺句からと云われているが、たとえ何十年の柳歴があってもまだまだ見逃がしている深味のあるユーモアを持つ身辺句経験句のあることを忘れてはならない

大文字酔醒めるよりはかなしや

橘高薫風

大文字の今燃えさかる美しさに思わず拍手し、やがて次第に消えゆく寂寥にふと人生のはかなさを感じた作者の気持が酔いざめのやるせなさ比べられぬ感じを遺憾なく詠まれている。いつまでも心に残る句である。

ゴム紐の最期プツンと言っただけ

吉岡遍児

働くだけ働き、そしてただプツンと切れる音だけ残すゴム紐の生涯。愚痴は云うまい、天職と信じ、天寿を全うして去りたいものだと教えている。魅かれる句である。

一日を飲み干すように大ジョツキ

香川酔々

作者が酒豪であることをよく知っている。そして今働きの奮闘家であることも熟知している。一日を飲み干すとはうまく己の満足感を詠みこなしている。実感句ほど強い

ものはない。

沈痛に焼香してる債権者

志賀木石

多くの焼香する者のうちにはたしかにこんな人もあろう。「沈痛」の文字が多くの複雑な気持をよく表現している。沈痛がこの句を非凡なものにしている。

靴べらは妻の手にあり妥協癖

菊沢小松園

これこそいい夫婦であろう。靴べらは妻の手にありという表現さすが老巧であり、頭が下る思いがする。

▼同人消息

×

- ▼工藤甲吉氏（青森同人）は本社勤務となり弘前から青森の自宅へ帰られた。〒030、青森市金沢一〇の49。
- ▼藤井明朗氏（島根同人）は国調統計一二〇戸分を担当、疲れましたと。
- ▼福田丁路氏（大阪府同人）から「氏神の祭りなのに来客もなく、昔のように太鼓も鳴らず、提灯を出す家も少くさびしいです」と。
- ▼久家代仕男氏（平田市同人）奥さんの入院で松江で一三夫氏に会えなかったのが残念。
- ▼有信新之助氏（大阪市同人）は同人総会当日撮ったカラー写真を全部の方に送られた。

近作柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

小走りのくせつき生涯平で居る

江城修史

サラリーマンの中には、真面目で、勤勉で誰の眼にも働きの者として映っている人なのに、昇進のチャンスが来ないのが居る。何かが欠けているのだからがわからない。それがこの句の上九に現わされているような気がする。

殺したのではないぞと蟬をかつぐ蟻

脇本政己

昔の戦争には戦利品というのがあったが、その戦利品を担いで、堂々と凱旋してくる部隊を思ふ蟻の行列。然しこの戦利品は自分達が砲火で葬ったものではないぞ、という表情を窺った観察に、この句の生命がある。

姐が財布のピンチ知つた音

岸本豊平次

台所川柳は既に相当詠みふるされているが、この中七の表現は新しい着想点だと思う。

正直に生きて信用されて老い

中島英子

一見、ありふれた句のようであるが、非凡な凡人の生涯を連想させ、人間の深さをよく詠まれていると思う。

ホステスとして猥談をリードする

ふきあげ虎城

お客が少しでも永くお店に居てくれれば、酒の売り上げもある。そうした生業の女性が、懸命の戦術を展開しているシーンが眼に浮ぶ。妙句。

薄情な方へ女はついてゆき

大西為二

類想の多そうな句ではあるが、女心の不可解さと憐みがよく詠まれているように思う。

接待を終えて茶漬を食べなおす

羽田一扇

接待客のお相伴では、箸数を動かしたようでもお腹がふくれない。そこでこの句が生れる訳だが、下五がよく利いている。

冷房へ蠅は上手に生き伸びる

山田スミ子

人間を蠅に置き代えて詠んだ句ともとれるが、何といわれても環境に順応して生きてゆかねばならない現実。詠嘆の詩として高く評価される。

風鈴は春夏秋冬の風を知り

三宅ろ亭

風鈴が四季それぞれに音色を変えるものではない。然し、聞く人その時々々の心に、夏の音、秋の風を悟るのであらう。人生も峠を越えたひとの心境がにじみ出た名句である。

キリギリス今は売られる為になき

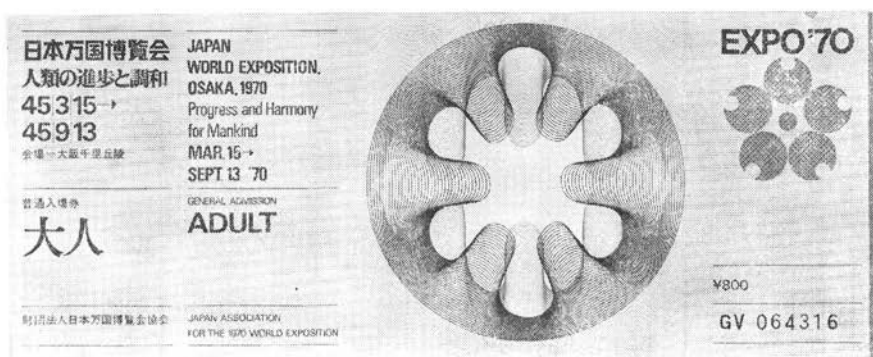
荒木鶴翠

秋の虫やかぶと虫は、デパートで製造販売されているように思い込んでいる子供達の為に、デパートの屋上売場では、キリギリスまで、売り声をあげているという現代のひずみに、鋭い風刺が利いている。

以下、鑑賞浅れの佳句

最良の日とはだまつて妻が酌ぐ
満ち足りて人工交配精を出し
胃腸薬のモデルにしたい顔が来た
月見草去年他人で来た河原
妻の助手相勤め候大掃除

十止庵
芳月
一扇
仲美
月美



日本万国博覧会 183 日。(45—3—15→9—13) 六年余の準備期間。三年がけで築いた夢の都市。

世界七十七カ国が大阪千里丘陵につどい、人類の進歩と調和を讴歌した。

6000万人の賛歌が世界にひびいたが、その中に川柳塔グループもいる。

そしてどのような川柳の目を向けたであろうか。

小 谷 葉 子

万博にこじつけみたいないな身内来る

開場前夜

どのへんにどない表現する調和

ハンガリアン・ダンスのままで伊勢音頭

大阪弁塔の上から舞いおりる

日本の庭の不思議に去りかねる

屋根瓦までお国から運ばせる

万博は観たい見せたい孫の知恵

出稼ぎの父は万博先に見て

万博万博と私に縁がなし

万博で本場のコーヒ飲んでみる

万博をカメラのアイで眺めて来

万博開会式

なびく風みな一つなり万国旗

枕そろえて万博の友を待つ

満天の夕焼け万博包みこみ

感無量万国博のマスゲーム

万国の平和と進歩は日本から

世界の瞳万博へ日本へ大阪へ

月の石はめずに台をほめて来る

世界中へ声高らかにこんにちわ

チャンネルは何処も万博逃げられず

世界の春ひらひら万博の豪華

ちっけな夢万博へ手内職

万博公害家計簿にもひびき

静馬

古方

半休門

双楽

不二

形水

どんたく

求芽

静観堂

花村

藤波

若芽

誓二

笑痴

明朗

南奉

君子

君

子

子

子

子

子

万博へへそくり着物忙しい

万博の客には風邪もひかされず

万博の客をノーションのんで待ち

生活を見たさに万博だしに来る

万博の券も買ったと便り来る

万博で世界を二日で見え帰り

万博へ遠い親類来るたより

万博迷子センター

迷い子になる気のワッペン恰好いい

万博で調和異国のシルエット

万博へ子守りさす気で居る女房

万博を吾がものとせず遠く居る

パピリオン並べて政治調和せず

万博ノ連館

チェホフの卵を生みそうな眼鏡

春愁のポーズを消してモノレール

人類の進歩と調和へ物価高

一日の世界旅行で疲れきり

背を向けても向けても万博の魅力

万国博進歩と調和の外でデモ

国力の相違を見せるパピリオン

万博へ音信不通が頼つて来

万博の公害を見る台所

百聞の上で万博見に行く気

過疎地帯から万博へバスが着き

露 声

病床で万博を見る世に生きて
万博がゆさぶる物価天をつく
減反も決り万博バスに乗り

多蘭子
みどり

万博を手をとり眺める人が出来
万博六十万人見て帰り
万博の話題も忌明けの膳にのり

可住

生 仏

万博のグラフィックだけに迷い
嬉しさは万博へゆくほどに癒え

秀 峰

万博は逃げないからとまだ延ばし

滋 雀

成 子

万博で世界が小さくなって来た

不二

万博へ出発を待つ灸をすえ
万博へ農婦海苔巻太う巻き

柳 彦

鹿の子

万博の文楽

英 子

万博は景気よし家計簿は赤

藤 持

一 治

宙釣りの狐へ青い眼ワンダフル
じいちゃんの万博土産に湧く茶の間

阿 茶

万博へ着いた団体先ず休み
人間の進歩か調和かくたびれた

勝 子

孜 孝

万博で大阪を見た日本人

不 醉

一生の思い出万国博へ杖をつく
牛売って迄万博へ行きたがり

初 甫

霊眼子

万博がえりは疲れしましたから話し

道 雄

万博にきてまで宝くじを買い
乗物がある万博に疲れ切り

素身郎

柳 志

万博の動く歩道も交通禍

明 朗

万博はおいしかったと荷をほどき

久米雄

薰 風

万博の電飾だけにドライブし

黒天子

美しい夢を万博残し行き

千 代

静 歩

万博の春に羽搏け新夫婦

夏 生

万博にきてまで不味いそばを喰い

公 作

鉄 舟

万博の駅に降りるともう走り

保 夫

万博で出雲訛りをふと拾い

古 心

史 好

太陽の塔へ一〇〇%口あけて

紫 吻

万博で東南亜細亜にこんな国

祥 月

水 洞

待ちかねた万博を見て三日ねる

欣 一

半歳の命万博揺れ始め

肖 二

千 子

夢殿の秘仏のような月の石

生 仏

進歩と調和まだ入れないながい列

鶴 声

半休門

二時間も待って小っちゃな月の石

志 津

何国の人か一会の茶を共に

晴 光

金 三

夜の列車万博帰えり皆眠むり

草 右

琴の音も聞かせて万博いいムード

輝 親

英 詩

どなたく

春 巳

万国博日本庭園

英 詩

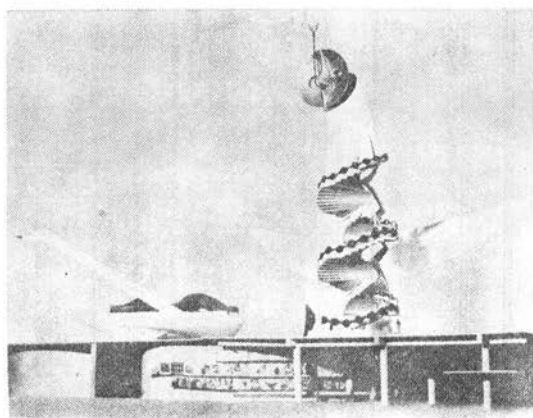
万博の広場へ阿波の緋がこぼれ
 万博でインド美人にひと目惚れ
 万博と逆のコースを行く休暇
 列作るから人氣のパビリオン
 万博帽国籍不明の型で行く
 人口増加未来はこうだと教えられ
 人々雨も地面に届かない
 万博へおいでと云えぬとDK
 万博は行けぬのでなく行かぬなり
 万博の感激七十七本の国旗
 黒人は黒人のよさがある美人
 ヨチヨチ歩きで万博の旅終り
 万パクへなびく草木となつて僕
 四海波静かに暮るる万博旗
 万博のこんな鏡の使いよう
 万博へ一日二日月の光を見て帰り
 万博へ人工河川に寝てかえり
 万博へ行つて来るぞと武裝する
 万博が日本に帽子させた夏
 マスコミをさわがせました万国博
 万博は夏休みの孫等を寄せて呉れ
 ドリンク利飲んで万博へ精を出し
 万博を敬老札つけ手を引かれ
 釜明けて万博見たさに鬼も来る
 万博は綿菓子のない村祭り

窓花 惠二朗 形水 求芽 弘生 曉童 鶴丸
 窓花 惠二朗 形水 求芽 弘生 曉童 鶴丸
 窓花 惠二朗 形水 求芽 弘生 曉童 鶴丸

太陽の塔孫も憶えているだろう
 パビリオンの見方がつかめないままで
 ひとりよがりみたいこの展示かて
 万博のムードそれでいて楽し
 万博も終ったわねとそれっきり
 万博で押されて子供得心し
 万博が済めば暮らしのひずみくる
 万博のメイドジャパンかき氷
 グロッキー積んで万博終電車
 お不動さんへ万博帰りが水をかけ
 パビリオン駆足で世界半周し
 公害もなき華やかな未来都市
 万博終り日本の秋深まる
 万博でにぎわう駅の汚れよう
 万博へ二度インテリの箔をつけ
 万博の灯も消えこおろぎ鳴きはじめ
 日本庭園でしみじみ秋の夜を憩う
 万博ですつと行けたはレストラン
 万博へ来て行列を見て帰り
 万博はサイン集めに回わられ
 万博へ暇と金とで疲れて来
 これからは何処へ万博のエネルギー
 万博にハンディ背負う日のとりこ
 人類の進歩と調和へ総疲労
 一ドルでアメリカ館を売る話
 野迷路

古方 水客 遠二 明朗 阿茶 晃男
 古方 水客 遠二 明朗 阿茶 晃男
 古方 水客 遠二 明朗 阿茶 晃男

万博で本社が賑わう
 北から南から、全国各地からことしほど本
 社へご訪問を受けたことはなかった。
 万博が大阪にあったおかげで、思わぬ方々
 に会えたことは何よりうれしかった。そうい
 う意味で巨大な万博が消えてみると、何かう
 らさびしいものがこみあげてくるのだ。写真
 の太陽の塔がベソをかいてるように見えて
 くるのも感傷の秋のせいだろうか。(F)



中央が太陽の塔 左が母の塔 右が青春の塔

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

一合で日本一の父になる
アイロンを休め男は浮気者

和歌山市 秋月 宏 方

低姿勢板についてる帆船前掛

寮歌唄えばいやがる課長中学出

養子かといわれる家庭うらやまれ

大洲市 米 沢 暁 明

赤紙も三度この世に生き残り

足元の軽さ静かに朝の試歩

たまに着る着物についてくれぬ肩

今治市 月 原 宵 明

日本語話す二世が胸を張り

岐阜市 市 川 鱗 魚

失 明 は

高 驚 亜 鈍

失明はしても俗臭とり戻し

立合いの瞬間白黒の一、二秒

氣狂が何か叫んで道歩く

長男の分別臭いのがきらい

利用価値がないから訪ねてくれず

人をあてにすまいと自分に言い聞かし

愛情は秘かに一方的がよい

自主性へ親はさならぬことにする

白いで魅入るが如き検温器

視ておきたかった蚤の市パリー

哀調の笛に逆らう質の札

天神の森の梟の目をおもひ

生きるより活かす権利を主張せん

ばくの眼へおろろ声にはばくも泣き

俗臭粉々女の尻を抱く

恥を知れ女の紐になり下り

お大事に若い按摩にいたわれ
勇氣という屏が重い齡となり

今治市 長 野 文 庫

魚が水得た高声になる軍歌

長島の三日分ほど欲しい金

古々兵の尾にヒレつけた武勇談

小松市 山 上 千 太 郎

児をさがす声どの家も夕餉どき

生きてゆくすがたであるべき起上り

俗物の名に生き甲斐を見つけたり

箱書の花瓶花の味しらす

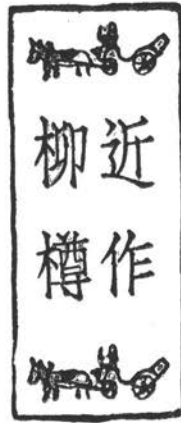


磨かれた伝統の味

司 子 集 押

鶴 屋 八 幡

本 店・大阪市東区今橋 5・電話 (203) 7281
東京店・東京都千代田区麹町 2・電話 (261) 3996
売 店・各百貨店のれん街



北川春巢選

大阪市 小 谷 葉 子

過去を追う花に微笑みつけましよう

イメージチェンジしてもネガはそのままに

取りえない女に秋風のとりまき

着付けにも胸のたかなりかくされず

野菊咲いて私の城をひきしめる

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

俺の靴俺がみがいて旅に出る

僧侶をけなるがり神官をあわれがり

勲章を吊って父ちゃん防火デー

ハガキなら書くが敷居が高いなり

虫干しのぬけがら同士手をつなぎ

守口市 野 呂 杜 月

公害に居ても立っても居れぬ秋

大臣も一度は嗅いで見るヘドロ

週刊誌恐れる程の恋でなし

里帰りしてなつかしく水鏡

豊作のため息農家から起り

東大阪市 坂 東 若 芽

十字架よ敵を愛するむつかしさ

死にみやげのことばに弱い父を連れ

月の石ほめずに台をほめて来る

ゲンゴローの波紋絵になる寺の月

大阪市 江 城 修 史

雑踏に暮しの違う話聞く

代打なき暮しの疲れ妻にのみ

再会の恩師は愛の鞭を謝し

真実一路一步も二歩も世におくれ

竹原市 三 宅 不 朽

野良犬にある日男みつめられ

人恋し飲めぬ男の落花生

洋食へ箸所望する古都めぐり

公害へ虹も半端な彩で立ち

竹原市 脇 本 政 己

平行線の女がいるあせり

背伸びしてみても十半の靴であり

これだけの俺だと妻に云い聞かせ

過疎ここのせめてのおごり星が降り

八代市 船 木 史 朗

青い鳥だったと此処へ来て悟り

ひとり居るときヒツピーの眼がかげり

土くれの鼓動へ残ることに決め

奥さんのパートは衣裳代に消え

和歌山県 ふ き あ げ 虎 城

わが国を確めて地球儀を買う

遠くを見る目付で夜行便が出る

謀ごとあるのか鯉が集って

言い勝った疲れよ月を見ていても

広島市 楨 田 英 詩

若竹の伸び親竹が背伸びする

千円の鯛千円の姿態見せ

土性骨情熱の火を絶やさない

男の長髪故郷に遠く住み

大阪府 阪 上 十 止 庵

俺の出る幕まだあろうと草を引く
雑種にも予防注射の御案内

何もかも知ってて妻の手がぬくい

完全に敗れていっそうまい酒

広島県 南 条 露 声

一枚のす垂れ昼寝の城つくる

退院の娘を待つ布団よくかわき

人質のように夫へついて行き

サロンパス跡も平気なとしになり

守口市 岸 本 豊 平 次

逆境が女に涙忘れさせ

ふる里に来て北極星を子とさがし

一律の昇給汗が苦情言ひ

岡山県 目 賀 芳 月

句が出そう出そう初孫抱き歩き

俺たちのノークョウ世界に名を知られ

人気投票胸毛五十票ほど稼ぎ

島根県 堀 江 芳 子

さりげない会話も夫婦血が通う

会える日があつて生命素晴らしい

子に聞かす例え話も氣を使ひ

神戸市 来 住 タ カ 子

婚約の指輪かざせば見える虹
一人居にあふれる蟬と虫の声

泣き顔の娘にわけは聞かずおく

大田市 藤田 軒太 楼

なにくそと力んでみたが五十肩

よそ様のことに涙脆くなり

初孫に余生みつめて祖母達者

大阪市 西本 保夫

まあまあとんだめる方が平社員

マイペース悠々と行く平社員

合理化へ狩り出されてる平社員

東大阪市 宮西 弥生

女教師の憂い子等は抵抗期

汚れなき心で名月見て飽かず

ええ方にとって人を疑わず

大阪市 小出 智子

叱られることもうれしい女です

意地を追う夫の靴を光らせる

敬老の日に寄せて

我が胸に住む倅薄き母なれど

島根県 榊原 秀子

冷戦のわけ人様は笑うこと

素足から生きる感触畑を踏む
湧く闘志だが今あえて戦わず

島根県 中島 英子

恙なくまた腰すえる敬老日

生き延びて古米にてこずる世と出会い

古稀らしい幟もはためく村祭

大阪市 黒田 真砂

カクテルは甘く心に距離を持ち

心の城へ昇る階段未だ続く

遮断機下る心の絆裁つ如く

鳥取県 近藤 秋星

夏痩せの後には味覚の秋が待ち

休耕田補償費だけの草が生え

婦人会やレレ運動会が済み

八尾市 高杉 千歩

赤飯もたかず佳き日をよそで酔い

母とある心安さの旅三日

伊吹山夜間登山

山頂の歌声星がゆれている

松江市 村松 酔歩

生活苦酷な雨だと言いつ切れず

黙否権金ヶ崎から来た女

移民妻險に過疎の村があり

笠岡市 山 本 柏 生

生活保護受けて子供らよく肥り

増産に励んだ休耕田の前に立ち

万博へ来て行列を見て帰り

大阪市 白 石 良 圭

黒田ダムにて(一句)

パンフレットではない黒田のダムに立つ

日曜のせめてリズムを狂わそう

腹さぐられる酒とも知らずついてゆき

松江市 内 藤 喜 夫

金という魔性に善人踊らされ

百姓は今年限りの稲を刈る

生涯を託す息子がゲバ振い

宿毛市 山 本 窓 花

過疎に一人残されながらも子を案じ

ひと押しのこれがはがゆい女坂

我腰の老い坂を知る気のおせり

堺市 栗 本 藤 持

円陣に何を売るぞと暇な顔

紅玉婚孫の見合いに薄化粧

土用干しまだ明治あり亡父しのび

新宮市 大 矢 十 郎

病人のように肥満児呼ぶ食事

景品が来て弥次馬も踊りの輪

遺伝などどうあれ進む恋でした

八尾市 飯 田 一 治

切り花にされて蕾のまま終り

大難を小難という数珠で耐え

騙まされてだます女となるえくぼ

鳥取県 両 川 洋 々

老父母がいて神棚もある団地

鬼才とも言われ偏屈とも言われ

取れるだけ取る気六法全書練る

竹原市 楠 貞 子

見舞客今日来て欲しくないベッド

吾が子程の看護婦さんに賞められる

注射針の痛さ気にせぬ程に病み

岡山市 泉 万 寿

敗戦は悲しきものよザル碁でも

酔うた日だけは素通りせぬ男

秋空の高さへ腹立つこともなし

東大阪市 斎 藤 三 十 四

上に立つ相と云われたままで老い

名月を待てず爛方せきたてる
交番もすすきを活けて月を待ち

愛媛県 渡辺都留逸

核家庭事態の是正なりがたし

ヨロメキもまんがも清濁併せ見る

清貧というはこれかや冷奴

高槻市 山田スミ子

アパートの窓で風鈴夏を耐え

百姓も米の過剰へ気を痛め

机上論聞いていられるいい身分

岸和田市 福浦勝晴

感傷の秋を地酒で宵寝する

ニッポンの顔がならんだパチンコ屋

島根県 大森孝華

乳の香のいつしか失せてバラ抱き

夏バテの枕へ重くチチロ鳴く

河内長野市 森本黒天子

万博はサイン集めに廻らされ

地藏盆一文菓子にも手が延びる

大阪市 河野君子

以心伝心会話のない夫婦

荷飾りの中の新車にある打算

鳥取市 山形春海

慰労会今日はきれいな汗で飲み

宣伝戦勝ったとたんに社が潰れ

米子市 石垣花子

誕生の知らせに祖父になった顔

二度三度母を病気にする遅刻

羽咋市 三宅ろ亭

放屁癖自分の健康法と言ひ

野望ない翁と化して菊作り

竹原市 生信笑子

名月の二人は青い人であり

雨だれは詩人私の好きな人

神戸市 横山孜孝

虫の音へすすきが銀のタクト振り

万博へ暇と金とで疲れて来

岡山県 武元柳子

打水がすめば夕立くるらしい

約束は守りたいけど大雷雨

島根県 志賀美栄

娘を送る十字路風の吹きぬける

三日三晩梅干しあげて娘の噂

七尾市 松高秀峰

定年へ抵抗のない顔に見え

公害も活気もなく過疎の村

今治市 渡 辺 南 奉

くずれても自力で積ます子の積木

泣いて勝つ子に勝たせない育児法

尼崎市 中 谷 利 美

セットした頭と顔がつり合わず

さわやかな目覚めマンション午後一時

宿毛市 瀬 田 美 知

夫婦そろって子がいて夜がぬくい

妻がいてほしい時に茶がはいり

大阪市 岡 本 ま さ ひ ろ

利き過ぎた冷房に日向ボッコをし

スナックバーソロバン頭に接待し

松原市 守 屋 万 竿

Gパンが似合い振袖がまた似合い

行列をさせて国鉄積み残し

岡山県 山 田 止 水

空間を買うマンションに地価がない

豊満な胸が校医を慌てさせ

東大阪市 落 合 思 月

安らいでほしい余生も作業服

灸すえてまだまだこの世に未練あり

大阪市 堀 口 欣 一

秋日和こも過密の八瀬大原

立ち飲みのコーヒがうまい勤め人

小松市 村 井 城 南

同い齡と聞いて見直す髪艶

諦めの早さこの子も父に似る

大阪市 藤 田 頂 留 子

宝くじ見るまでの夢こりもせで

これからは何処へ万博のエネルギー

島根県 東 原 福 子

あるときは長所にもなる気の弱さ

追憶をひそかにたぐる舞扇

鳥取県 林 露 杖

減反を嘲るような稲の出来

サングラス外して墓を洗うなり

寝屋川市 福 富 隆 子

敬老会細いズボンになおさせる

内職をはじめ喧嘩もとぎれがち

岡山県 武 内 雅 堂

税務署の来る心配のない休日

ひさしぶり妻を迎える窓明り

大阪市 平井露芳

増え過ぎた白髪保存と決めました

三・三倍してから土地の値がわかり

岡山県 山雅子

野を染めて今日の暑さが暮れてゆき

二足なら安いと赤札買わされる

竹原市 簗田浄美

駆けて来たらし電話の熱い声

命預けますそんなあなたでいて欲しく

羽曳野市 麻野幽玄

虎の威の心算の名刺添えて出し

七人の敵へ内助の知恵も借り

大洲市 堀内曉風

公休が待ってる棚は落ちたまま

当選はビリ実力は議長席

高知市 竹崎寛

終戦忌日本列島静かなり

終戦忌あの日の権力が怖かった

岡山市 谷森和風

ホステスへちょっとかいひもにかみつかれ

貧乏を知らない人がする政治

仙台市 川村映輝

敬老の日だけチャネル自由にし

混浴は女の方から入って来

今治市 大本バット

煩惱の塊という齢になり

言いかけて齢が知れると気が付いた

今治市 原田輝親

妻が気にする妃殿下のお召物

台風十号

高潮が引いて鰻が干し上り

今治市 今井松花

セールの口見ていたらしゃべり止め

西海町海中公園見学

食料にならぬ小魚の美しさ

今治市 古野伶人

見る阿呆一番前の棧敷席

阿波踊足が揃うた手が揃た

尼崎市 小林文月

スモッグのまだ届かない田舎駅

出雲市 板垣草丘

いのししの息一匹ではない雨戸

泉佐野市 大工静子

大学を出した許りにのれん捨て

欠点のなきが欠点うちのパパ 島根県 錦 織 文 子
 横綱を夢見てきょうも胸を借り 岡山県 本 倉 英 峰
 羽曳野市 大 峠 可 動
 秋の詩うたえぬ人と食べるこ 西宮市 丸 山 孔 一
 ちよっとだけ付き合おうかであとは虎 鳥取市 有 田 鹿 の 子
 古古米になるとも知らず稲実り 愛媛県 西 田 夫 生
 造血剤のんだとて損蚊に吸われ 今治市 真 山 国 彦
 外からは引っ込め内はまだ稼げ 今治市 伊 藤 一 郎
 娘持つ身は挨拶も念を入れ 和歌山県 塩 見 白 俊
 会長も大株主にごまをすり 和歌山県 辻 本 拓 春
 会長が厳しく裁く黒い霧 和歌山県 加 納 花 秀
 本心にさからうように女酔い

大 阪 文 化 祭 (第22回)
川 柳 大 会

日時 45年11月23日 (祝) 11時開場・午後0時半開会
会場 大阪市中央公会堂 (3階・小集会室)

句集	賞	宛 先	締 切	投 句	席 題	兼 題	講 演
入選句集希望者は一〇〇円別送のこと	席題・兼題とも秀句に、府知事・大阪市長・府市教育委員長から「川柳賞」選者から「選者賞」を贈呈します	(530) 北区中之島1大阪府教育委員会内 または、せんば川柳社・川柳瓦版の会 川柳塔社・川柳文学社・番傘川柳本社 でも投句を取次ぎます	11月10日 着 限	各題ごとにハガキ1枚に2句ずつ 住所・氏名・雅号を明記して郵送	当日2題 発表 (11時開場・締切正午)	司 会 開会の辞 「窓」 「盃」 「公害」 「波紋」 「神話」 閉会の辞 波 堀 清 広 大 伊 橘 西 部 口 水 瀬 田 東 高 田 白 塊 白 反 佳 静 薫 柳 宏 人 柳 省 凡 夢 選 風 子 洋 選 選 選 選 選 選 選	大阪教育大学教授 前 田 勇 氏

主 催 大阪府・大阪市・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会

川柳五十三次 (四)

富士野鞍馬

2 川崎

品川から川崎まで二里半(九・八キロ)、その間に大森を通る。

大森土産おぶさった子にも遣り

柳升(一一三)

切先で麦わらふえの値をつける(拾二)
麦稈笛など麦稈細工を売る店が軒を並べていた。「切先」は納太刀で、大山詣りの客とすることがわかる。

大森は枯木を海へ植るとこ 横井(八〇一〇)

大森は筵の屏風外とへたて 半下(五九三)

また大森の海からは海苔がとれる。そのソダを枯木としやれ、乾す筵を屏風に見立てている。

初上り土産に配る和中散 風松(一一一八)
すれすれに三人くらす和中散 (武八二)

わき目からしつきやくまけの和中散

(三二拾一〇一)

御成道車はとめぬ和中散

赤奴(七二一八)

水車干からびている和中散 鮎蓑(九〇三〇)

広重の大森の絵には和中散の店が描かれ、水車のような製薬機が見える。

この和中散の店は三軒並んでいた。その真ん中の店に成門があったという。三軒も同じ店が並んでいるので費用倒れ(しつきやくまけ)にはなりはしないかと川柳に作られている。和中散というのは風邪薬であった。

大森の茶漬十九ではつくひ

草夢(三五三二)

女の十九才は厄年で、川崎大師へ厄除けのため参詣する。その道で昼になったのである。それから六郷川を渡舟で渡ると川崎である。

わたり舟四十そこらと二十四五(二四二七)

二十五と四十二でこむ渡舟 (二三)

厄年は、男二十五、四十二、女十九、三十三で、それぞれ厄除けのため川崎大師へ参ったものである。広重のどの絵もこの六郷渡を描いている。

大師河原へ連立つ七十五 清江(三一五)

これは四十二と三十三の夫婦。

お十九と見えて鉦打川を越し

泉齋(二二六二)

六郷を娘で越る縁遠き

白浪(六六九)

「鉦打」は高級婦人の駕であり、その頃女十九といえは婚期を過ぎていたのである。

川崎へ参るかげまはもふいけず (二二二)

かげま(男娼)も二十五にもなれば「もういけず」である。

この厄除詣は、毎年一月、五月、九月の二十一日で、その弘法大師を祀る寺は、真言宗金剛山平間寺である。

四十二は大師様ざりにて帰り

雨譚(寛初二九)

厄年に東海道をちつと見る

江戸から四里半(一七・七キロ)、それで

も東海道をすこし歩いたことになる。

平間寺参道に、亀屋、万年屋など奈良茶漬の店があつて、たいいていこで支度をしたように、弥次郎兵衛、喜多八も万年屋へ立寄ったことに、一九は書いている。

うる覚え十五年あと来たお寺 (一八二)

万年屋十五年目で内儀くひ (七〇二)

九や三を二がつれてゆく万年屋

石弁 (百三三)

十九と三十三は十五年目になる。

あなたもかわたしも三と万年屋 (二二九)

これは三十三同士。

縁遠い振袖の来る万年屋 水紙 (傍二二六)

これは十九娘。

厄年はけんとかでよる万年屋 (七三九)

名の高い奈良茶は亀屋万年屋

一交 (三七四)

大師様奈良茶は亀屋万年屋 有華 (五四三)

きのう・きょう

本多柳志

◇相撲好きの大名が、いつも上手に負けてくれる家来共では物足りなくなつて、一番横綱雷電と取つて見たいと云い出した。重役達も雷電と取らせて見て、傲慢な鼻をへし折つて貰うのもよからうと、関取に其の旨を含めて取り組ませた。四つに組んだ雷電の耳元へ大名が「関取二百両二百両」とささやいた。こ

なだめてたい屋号を詠んでいる。

奈良茶くひくひ品川を息子きめ (二二七)

女房をしばつて奈良茶食っている

(二二五)

これも亀屋が万年屋で、品川で遊ぶ心算をしている二十五の息子。松が岡へ逃げようとした女房を捕えた亭主を詠んでいる。

川崎は麦の中から帆かけ船

箱扇 (二二九)

このあたりは麦畑が多かつたようである。

六郷川のすこし上流にあつた矢口の渡は、

正平十三年(一三五八)新田義興が、穴をあ

けた舟に乗せられ、足利氏謀略のために不覚

こは一番上手に勝たせてやって二百両をと決心してそこはプロの事、物の見事に負けてやうた。二、三日して殿さまお約束の二百両をと申し上げると「関取あれも手の内じや」と云われた。これが八百長相撲の元祖といふことらしいが、辞典を見ると八百長とは「申し合せて順当な仕合いをしないこと」となっている。西鉄の永易選手に初まったプロ野球の八百長事件も、其の後各方面へエスカレートして毎日のニュースを賑わしているようだが、大体プロ競技に八百長はつきものである。今頃こんなことで騒ぐのはおかしいからである。いつも本命が楽勝したのでは面白さも半減するのではないだろうか。

の討死をしたところで、新田大明神がある。

ちつとばかり矢口で話す太平記 (拾五二五)

呑口があるに義興気がつかず

一徳 (四四三)

と川柳に詠まれ、謡曲、浄るり、芝居にもなっている。

品川へ沈めにかける矢口づれ (六一九)

と、十日の新田参りから、品川で遊ぶ人もよくあつたようである。

この川崎宿は、一番あとに出来た宿駅で、

品川、神奈川の間に五里(一九・六キロ)も

あつて不便だったから、元和元年(一六一五)に設けられたのである。

◇八百長といえば、いつも年中行事になっている今年の春斗も、私鉄の一日ストと一部公労協の時限ストの内に、とにかく終つた。この年中行事的な春斗をもつとスムーズにそして能率的に出来ればユーモラスにいけないものかと思う。双方で実現性のない数字をもち出して徹夜までして、何百万人の足を奪うストまでやって、最後には予定の数字で折り合ふというような、体のよい八百長なんかやめて、初めから出来る数字を出し合つてあとは、くじ引きか、じゃんけんでもやって談笑の中に解決して貰えんものかと思う。そろそろ年末斗争のシーズンである。

妥結してから手の内を笑い合い

柳志

九輪抄

清水白柳選

竹原市 生信 笑子

わきいずるものあり土に生きんとす
我れまねくごとし波間の灯があかい
青春は苦がしぬかるみ這うごとし

岡山県 直原七面山

自然とは落葉が肥になる世界
活気にも満ち公害も満ちた街
取り替への出来ぬ我が子だから困り

富田林市 定金 冬二

水虫をみな飼うているビルの窓
笑えない喜劇を書きに行く夫婦

倉敷市 小野 克枝

差しのべた手が握れない頑くなよ
もう一度結び直している秘密

八尾市 飯田 一治

心凍て野良犬のごと美を避ける
老い悲しみずから偽善なる顔に

守口市 羽原 静歩

求人欄 鎖の活字読んでいる
冷え切った紅茶アダムとイブが飲む

大田市 堀内 暁風

大胆に虚飾の鎧着て稼ぐ
世の無情老醜一人酒を酌む

八尾市 香川 酔々

よそ目には平穩無事の灯りつく
飢えた蛇ビルよじ登り天へ消ゆ

竹原市 時広 一路

寄り添うて大樹意外と住みにくい
一本道何故まっすぐに歩けない

大阪市 小谷 葉子
背信の片肺だけが炎えている
仮初めの恋に女をうずめゆく

岡山市 川端 柳子
今 虹の麓に佇ってVサイン
雨後の虹見て来客の一人去る

島根県 榎原 秀子
眠られぬ夜をうた歌う花探す
序列気にして前進をはばむもの

倉敷市 小幡 里風
去来する愛情雨にぬれている
大空を傘に広げた未来図よ

大阪市 阪上十止庵
独身を主義としつつもルージユ濃し
たしなみの化粧に齢はなけれども

倉敷市 中島 末子
くりかえす悲劇よ誕生日をしらす
月光を喰べ純潔の乳房はる

島根県 志賀 美栄
さりげなくきびす返して抱く孤独
原点に立ち一粒の米に謝し

竹原市 森井 菁居
落日へ草うなだれたままでなし
水すまし動けるうちは動いなく

竹原市 三宅 不朽
いつからか早起眼覚めを考える
病む河の秋のひびきもなく錆て

熊本県 有働 芳仙
君が代を無理に転がす舌の先
年輪の外へはみだす過去があり

東大阪市 久米奈良子

吸取紙疎遠のひとの名をとどめ
打ちよせて過ぎたる愛は波に生き

今治市 月原 宵明
郵便貯金おろす日眉毛毛付けてなし
ジンフィズ女喝きに耐えんとす

島根県 小砂 白汀
長期予報などとおこがましくもいう
三十年の積木崩る妻が病み

八尾市 高杉 鬼遊
夫婦とは不思議なものよみつめ合い
明け渡すつもり城を押して来ず

島根県 堀江 正朗
どの距離に救われる日の視点置く
なぐさめに溺れ心の手綱とる

神戸市 来住タカ子
ディスカントして夏枯れを切り抜ける
嫁ぐ日の娘の盛装にみる童話

岡山県 三輪 康明
雑草も唯太陽を味方とす
ドラが鳴る月並の恋のドラが鳴る

伊丹市 小川静観堂
秋なれや拭きむら残している鏡
あれからは自分の影へ鍵をかけ

和歌山市 垂井 葵水
四面礎歌心支えるものがない
憂きことを捨て激流の中に居る

倉敷市 水粉 千翁
錦織 文子
江城 修史

島根県 清水 一保

島根県 錦織 文子

大阪府 江城 修史

水粉 千翁

岡山市 泉 万寿

老妻の首まで土のにおいする
岡山市 武内 雅堂

島取県 両川 洋々

意見する言葉俺にもあてはまり
島取県 近藤 秋星

運動会どうにか雨を持ちこたえ
大和市 宮地 双楽

ミニの娘の逆徳利を笑えない
東大阪市 竹中 綾女

万博へ行かぬ自慢を聞き流し
岡山市 山田 止水

勝気だけ取柄の妻にさからわれ
大和市 木村 水洞

定年になってきれいに髭を剃り
大和市 正本 水客

或る死
富田林市 岩田 美代

焼香の足許の蟻おおきくて
アイヌ部落にて
大和市 神谷凡九郎

団体のレンズにアイヌ値が合わず
小松市 村井 城南

笑い話にもなら話 私のまたた種
羽路市 三宅 ろ亭

野次馬となって歩行者天国の群れ
大和市 有信新之助

長い夜に妻 本を読む世界持つ
大和市 有信新之助

小気味よく空いたグリーン車通りすぎ
札幌市 平野 青夜

さつばろの人の恋しさ雪を待つ
神戸市 仲どんたく

古い孤独隣の犬と語る日日
倉敷市 奥谷 弘朗

水上の黒点となり冬に釣る
八代市 船木 史朗

どっちみち家は建ちやせん飲むとする
前置きに自惚れが見えいやになり
情熱が去ったら虫が鳴いていた
憎い程退く汐時を知っている
大和市 宮尾あいき

広島へ嫁つた娘の初産に
母へ遠く初産の娘をいとおしむ
子が泣けば母もいっしょに泣くならん
和歌山市 小川佐知子

なまじかのブライドもって嫁きおくれ
幸せが思わず知らず唄になり
東大阪市 落合 思月

償いのつもりで妻の肩をもむ
へそまがり同士友情持ちつつけ
和歌山市 秋月 宏方

昔なら牛でも買えたカブト虫
うそという世渡りにいる潤滑油
岡山市 出原 敬一

数珠を手に四十の女何迷う
気がつかぬうちは他人の顔でいた
愛媛県 渡辺 暁重

仕事場をおそれもなく老妻のぞく
歩道橋利久で渡るものでなし
和歌山市 高岸 桐蔭

ためらわず紅茶の方へ足が向き
枝豆を一粒一粒姑の愚痴
小松市 四方天弘実

冷房を効かしたドアが客拒む
終点へ行くに眠れぬ旅の空
松江市 柳楽 鶴丸

二人四脚夫唱婦随婦唱夫随
政治公害出稼孤兒交通遺児
高崎市 竹崎 寛

夕焼けを背に生命ビルが立ち
寡黙の龍馬へようしやない海の風
岸和田市 福浦 勝晴

家が総立ちになる油虫
新聞を配ろうボクには明日がある
堺市 栗本 藤持

三人のデート一人が邪魔になり
口下手は咳も話のうちに入れ
青森市 工藤 甲吉

どうしたらそんなになつた妊婦服
定年のわびしさ沈思黙考す
島根県 堀江 芳子

金のない頭痛へ薬すすめられ
子の居ない夫婦うちの子頼りきり
干しあげるシャツの真上に昼の月
桜井市 岩本雀踊子

一円を生かしてつかうのも女
それだけの事で人間腹を立て
よっぱどのうれしさ母がけつまずき
清水 白柳

鮎釣って童心朝の陽にあふれ
その風に敷居のゆとり教えられ
月の石見たか見れたか背のびして



隠居した開業医

小川 静観 堂

死ぬこととみつけた忠義死にそこね
雲に手を振って亡妻ようお寝すみ
孫0才阪大医学部の夢もたせ
足弱車の万博はカラーですませとき
好きな人を夢にのせて老らくまたたのし

職業軍人という言葉は明治、大正頃には無かった。私は天皇陛下の股肱の臣とおもっていたのでいまでも腹が立つ。陸軍見習医官を六カ月、やっと少尉に任官した途端に明治天皇崩御。大正三、四年の日独戦争初陣、金鶏勲章功五級頂戴、方々からの求婚を断り、学生時代からの初恋は北海道の修道院へ行ってしまう。

その後は事変のあるたびに自ら志願して南船北馬。そこまではよかったがアメリカに敗けてしまった。山が富士なら酒は白雪の伊丹で開業成功の部。女房と死別。孫男子二人、阪大に入れて、一人は開業、一人は教授の夢。

主婦 八木 千代

翼もう忘れて母は巢をぬくめ
まな板のくぼみに亡母はまだ残り
さりげなく客を送って揉め直し
産業をわたしも擔う手内職
ふすま半分閉めてひとりの城つくる

家族の中でひとりだけ女というだけで、「おい」「かあさん」「母上」「ノブコ」と、一日中、こき使われています。その上みんな客好きで、玄関から、裏口から、勝手から、「ハロー只今」「ちよっと待ってね」と、小走りにウロチヨロ、ウロチヨロ頭のなかは晩酌のおつまみ、今夜の食事、お茶受け弁当のお菜、漬物、年寄りの箸やすめと家族の食事づくりでいっぱいです。

年寄りの世話をしながら、ほうきと雑布、市場籠、まな板とエプロン姿だけは一人前と云うだけの毎日、はたらくうたとは、おこがましい。家事をしながら、歌はよくうたいます。



同人特集

会社役員 岡村久志良

花の下もう踊ろうか踊ろうか

酔っぱらって殴って欲しいときもあり

首を絞る相談ちびりちびり飲み

苦勞したね易者が言えは泪ぐみ

B Gの欠伸見つけた秋の蠅

気短か、頑固、その上自他共に許す健忘性面と對って言われきたえん顔をする。

健忘性度々念を押してくれ……これが僕の自画像。しかし、家族たちをてこずらせているこのミスター頑固氏、意外と他人様には親切との評判もちらほら。教師生活三〇年、教育行政の府一〇年、この固い宮仕えがよく続いたものだ、自分ながら感心している。理解と温情主義で貫いたという自負、「長生きせえ」と、悪友からいわれるゆえんか。

瑠璃色の空と緑の久志良村……凡そ、公害など、縁のない田舎から出すこの原稿、大阪だせめて背筋をのしとこう。

主婦 林 瑞枝

エラーした孤独 鞆の重い帰路

大晦日 歳暮に添えて請求書

軌道に乗るまでの内助の細い腕

仕入部の引き出しサンプルつめ込まれ

こげつきの集金終えた美味い昼

公務員と教師の出会いであつたふたりが、ふとしたことから食品会社を設けて十有余年、ようやく軌道に乗り、一旦緩急あればどんな役にも応じる一人数役の主婦なのである。二カ月ばかり前から、朝の配達に回されて十カ所の問屋さんを一時間で回りきらねばならない。

初心の頃は帰宅が遅れると家族を心配させたものだが、今では私のハンドルも七年のキヤリア、問屋さんと共通の話題に花咲かせたり朝日に映える霊峰大山を車を停めてうっとりする時、ドライブバーならではの素晴らしさである。集金、金策、外交等、主婦業に専念できるのは日曜だけと云うけたたましさの中から、忙中閑あり私だけの余暇を見出して作句しています。



編集 谷垣史好

アイデアがまとまり回転椅子もとまる
白雲悠悠あてなき旅に出てみたり
一人一人雇えばこども気を使い
箒持っても俺には肉体労働さ
校正のできぬ人生だから愉し

柳歴も短く、句の数も少ないが、それにしても、はたらくうたが僕には殆んどない。
計算してみたら、この十年間に正味働いたのは四年とちよつとで、あとは前後三回に及ぶ入院生活と家庭療養に明けくれた。川柳を始めたのが入院中だから、はたらくうたがないのは当然かもしれない。長い病氣のため会社はクビ、脱サラリーマンを余儀なくされていまはフリーの編集屋。神経を使う仕事だが宮仕えでは味えない自由さがとりえである。好きなことをして、お金がもらえ、それが職業になる、結構すぎるじゃないかと云われるが、そういえばそうかもしれない。

鍼灸マッサージ師 堀江正朗

正座して働くズボン汗を吸い
灸点をおろす隙間もない背中
ミニスカート働く指をあわてさせ
確めて見ねば手さぐり気が済まず
むち打ち症補償もらえげろりとし

終戦の年から約二十五年。少々ワンマンにもなり自分の思い通りの治療をして今夜頃は治りますと手を離す。田舎もミニスカートで腰を揉んでいるうちにまくり上って、慌てて手を引っこめるが本人は平気でいる。皮肉なもので疲れた時に限って大男がやってくる。大男とて治療代は余計もらうわけにもいかず、汗だくで揉んでいるのに、いい癖をかく。そんな時は思いきりツボドコをぐつと押えて目を醒ましてやる。働ける人の為めにまだまだ力いっぱい稼がねばならないが、パチンコをして肩が凝ったと言ってくる奴は大嫌いだ。が止むを得ない。



同人特集

石鹼化粧品卸業

小野克枝

声援を感謝しながら振り向かず
猫の手も犬の手もないから慌わて
返品も商品のうち有難う
景気よく仕入れた時の荷が残り
しみじみと顔を見ることが無い夫婦

テレビのコマーシャルに乗せられる商品は、放っておいても注文が殺到します。どんなに質の良い良心的な品物でも宣伝力の乏しい商品は売れ行きが芳ばしくありません。これは私たち小企業者にとって大変嬉しいことであり、反面頭の痛いことでもあるのです。金さえ出せば何でも手に入る有難い今の世の中。古々米が山と積まれ遊休田に対しては補償が支払われていると云う現実を目の前にして、物の価値観にのみ捕われないうちと人間味のある心の養成に力を尽したいものだと思ふと柳を半分も知っていないわたくしが近頃しきりと考えているのです。

黒潮躍る

紀州路へ



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに6号…(毎日)…12時51分発

急行 きのくに11号…(毎日)…16時40分発

急行 きのくに7号…(土曜)…13時21分発

＜白浜・新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発

夜行直通列車…(毎日)…22時15分発

●きのくに6号ときのくに7号は座席指定席券を 他の列車は座席整理券を発売

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車

山陰の人たちに会う

—— 松江の七日間 ——

不二田 一三夫

一週間も大阪を離れたのはこんどがはじめてだった。十月号の編集から二賞の準備や、原稿などを早目に書き、九月十四日二十一時三十五分発「だいせん」の寝台車に乗りこんだ。

寝台車の中段の青年は米子、上段のお嬢さんは松江まで行くので起こしてもらおうように頼んでおいた。十五日の朝六時〇一分松江着なので、いつもなら寝るころの時間だからである。

十五日は玉造温泉の名門「長楽園」で三才になった恋人一家と一泊した。ここにいることが木次の堀江芳子さんの知ることとなり、夫君の正朗氏と共に電話で声の対面よろしく、「明十六日は米子の八木千代さん、林瑞枝さんらと合流させていただきます」とのことだった。

宍道湖を横目にはげしい雨の中を突っ走っ

てきたが、大露天プロへはいるころには満天雲一つなく中秋の名月は冴えに冴えていた。あすは三人の方に会うのだが晴天うたがいなし、恋人一家の笑顔また楽しかった。

瑞枝さんの運転で千代さんが来られるすこし前に、芳子さんが元気な顔を見せてくださった。

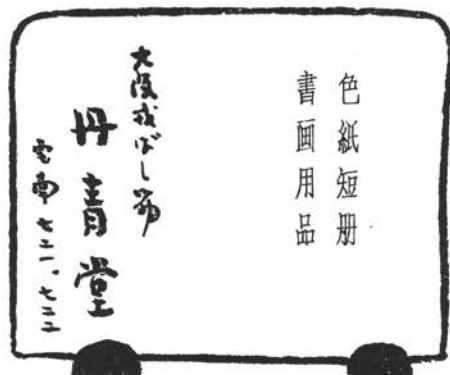
「あまりお話をしてくださらないとおもっていましたが……」とは皆さんの述懐である。どうもボクのツラがまえば、どこへ行ってもコレだからこまる。

話がはずんで、恋人一家ともすぐ打ちとけるあたり川柳人ならではのことであろう。

このマダムトリオの提案で、恋人一家も同道で夕やみせまる松江城へ車を走らせる。城内の事務所所で「川柳まつえ」の御大岡崎祥月氏に会った。

「歓迎句会の兼題を『寄席』にしてお待ち

していただいたのに……」
まったく申しわけないことだったが、「いつも川柳会（尼緑之助氏主宰）や、『むらくも川柳会（藤井明朗氏主宰）の合同句会までおことわりしたのである。柳務という柵を越えた生活の中で『恋人』と遊びたかった身勝手をお目こぼしねがったことである。」
松江城をおりたところに出雲そばの店があった。瑞枝、千代さんらと恋人たちも名代の舌つつみを打ったが、それよりも美味だったのは、この日、朝四時に起きて千代さんご夫妻が、ボクのために鯛釣りに行ってくださった小鯛の風味だった。



「生まれてはじめての鯛釣りでした」

この人情の味は永久に忘れることのできな
いものになるだろう。

十七日の夕刻、柳楽鶴丸氏が車で迎えに来
てくださることになっていたが、それよりも



写真前列左から西田淳子・筆者の恋人朋子・堀江芳子
さん・林瑞枝さん、後列八木千代さんと筆者
(カメラ、瑞枝さん)

すこし早く、昨日松江城門前でお別れした芳
子さんがやはり車で迎えに見えた。

パチの当たるような厚遇である。それがそ
のまま宍道湖のレークガーデンの会場から帰
宅までつづいたのだから、感激のしっぱなし
だった。

出雲からは島根の大御所尼縁之助氏、川柳
塔賞作家の王紫さん。木次からは藤井明朗氏
に堀江正朗、芳子ご夫妻、石田清泉氏。お膝
元の松江からは岡崎祥月、小林孤呂二、柳楽
鶴丸諸氏。(中川晃男、石坂新雪、吉岡通児
諸氏は出張中だったし、その他の同人諸氏に
お会いできなかったのが残念)

島根の人たちに出て、まず驚かされたこ
とは、句会などで選者吟の出来、不出来を全
員で追及することだった。

「選者をつるし上げようにすることはちよい
ちよいあります」
はげしい気魄だとおもった。

会場へ「恋人」を連れて行ったため、芳子
さんと紫さんにお守りをしていただくなど、
最後までお世話になった。

十八日夕刻には鶴丸氏の来訪をうけ、とう
とう夜十二時すぎまでしゃべりこんでしまっ
た。あずのお仕事もあるのに悪いことをした
と思っている。

×

鳥取駅を往復するとき、ポケッから腕巻き
時計を出して黙礼をした。その時計は故藤本
礎山氏(鳥取同人)からプレゼントされたも
のである。時間がないので佳女未亡人やご子
息にお会いできないおわびのつもりだった。

×

「川柳塔には、なにかあたたかいものがあ
るから同人になった」という山陰の人たちの
言葉を大切にしたい。

恋人に逢いに行くとき、栞氏、阿茶女史、
若芽さんや葉子さんがおもちゃなどをみやげ
にくださった。柳縁につながる「彼女」は幸
福である。ボクもまた果報者である。

山陰の皆さん、ありがとうございました。

×

堺古剎周遊吟行

十一月一日午前九時集合、九時半出発。

(堺裁判所前集合・高野線堺東駅下車一丁南
堺市役所西隣)

行先一観光バス乗用。妙国寺→堺港→臨海セ
ンター→大安寺→南宗寺→桜井神社→法道寺
→泉北ニュータウン→イタスケ古墳→仁徳御
陵→延寿荘で昼食。午後四時三十分散会。
会費は実費。

主催：千代の会・堺川柳会・若芽川柳会。
▼中島生々庵先生が参加されます。

世 渡 り

野 田 素 身 郎 選

世渡りもうまく納税組合長
 世渡りが下手で何でも任される
 世渡りの下手なあなたが憎めない
 口上手なお人世渡りも上手
 世渡りのコツ済みません済みません
 世渡りの恐さも知らずヘルメット
 世渡り下手で汚えない地位に居る
 世渡りにこれも欠かせぬ足袋扇子
 戒名にまで下手な世渡りつきまとい
 世渡りの教科書絵本太閤記
 世渡りが上手チャンス逃さない
 世渡りの下手なとこまで俺に似る
 世渡りの為に脱いだり写したり
 世渡り上手時に馬鹿となり
 世渡りの辛さまたもや節を曲げ
 世渡りの辛さを秘めた葉つ葉服
 世渡りにつかれ寺恋う老夫婦
 定職も持たず世渡りしてる髭
 世渡りの一つお世辞も言うてみる
 世渡りを泣かせておぼえさず船場
 世渡りへ肩書きむげに捨て切れず
 世渡りは下手でも子供は一期校

世渡りの一端披露した祝辞
 三十年世渡りの差が今の地位
 世渡り下手が自慢のコップ酒
 世渡りは下手ソロバンは達者です
 世渡りの悲しさ時に嘘も言う
 世渡りが上手何でも利用する
 世渡りのこは頭を下げておき
 世渡り
 Uターンレカールススイスイ世を渡り
 世渡りに疲れて手相見してもらい
 世渡りがうまくてクラス会に来ず
 世渡りは下手で心配ごともし
 世渡りは下手でおました七回忌
 世渡りに名刺二通り使い分け
 世渡りの道具の酒がたしなめず
 世渡りのコツを敬老会で聞き
 世渡り
 天
 地
 人
 軒太楼
 章雅
 南奉
 信二
 白
 十止庵
 葵水
 木魚
 信二
 芳仙
 綾女
 南奉
 肖二
 葵水
 正朗

サン プ ル

隠 岐 不 醉 選

怒るバカ見本はよいにきまつとり
 サンブルの小堀旅行に重宝し
 サンブルを見ててもわからぬ陥車
 文月
 十止庵
 国彦
 店先で美人のサンブル出来上り
 サンブルも添えて返品されてくる
 サンブルを撒き餌のように宣伝し
 サンブルを置かせて妻の愚痴を聞
 サンブルと違う目方のテキを食べ
 ちっけなサンブル大きくまよ
 サンブルは宝石ほども包み込み
 サンブルにしたい先輩が使い込み
 サンブルの隅へサンブル優待券
 新聞の隅へサンブル
 信用の輪をサンブルの上につけ
 顔色を見てお茶を出す見本市
 試供品母にはすまぬやせ菜
 色褪せたサンブル案外美味い蕎麦
 定価にはサンブル代も入れてあり
 サンブルのような顔して見合の座
 サンブルは八頭身に合うサイズ
 サンブルも豪華商魂金をかけ
 お仕事を聞けばサンブル出と呉れ
 サンブルで釣られた馬鹿を見直
 見学へサンブルちゃんを用意され
 サンブルの服地マネキンと似合い
 サンブルに薬名一つ教えられ
 商魂はサンブルだけを負けてくれ
 サンブルを出して話題のとりこ
 サンブルを付けて値引はしてく
 サンブルが国の文化の戸をたたき
 叱られ方のサンブル先輩見せて
 それ位はサンブルだりもオシヤレ
 古方
 素身郎
 道雄
 信二
 正朗
 孜孝
 英子
 杜月
 秀峯
 千翁
 輝親
 軒太楼
 白汀
 七面山
 ろ亭
 肖二
 新之助
 扇水
 千翁
 芳子
 宵明
 松花
 英子
 里風
 春海
 芳仙
 葵水
 正朗

サンプルを置いてセールス如才な
夫唱婦和のサンプル見せて娘を教へ
サンプルを集めて決心まだつかず
洋食のサンプルも見てうごんし
サンプルもうまく使った娘の化粧
サンプルを置いて問屋又来る気
サンプルに釣銭のせて如才なし
サンプルは見るだけは見て又来す

代仕男
曉風
秋月
秋水
初甫
曉明

佳
値引せぬ代りサンプルたんと呉れ
サンプルで見たより映えた服とち
サービスにサンプル品を添えて
話より先ずサンプルを出して見せ
ただくれるのに愛想のよい見本

伶人
誓二
七面山
軒太楼
十止庵

人
引いておく代りにサンプルたんと呉れ

ろ亭

地
セールスはサンプル置いと来る気
天
サンプルのように美容師髪を染め

正朗
一郎

軸
見本にも到底のぞめぬ月の石

前置き

川竹松風選

前置きのうちに白けた座の空気
前置きも母はこまめに聞いてくれ
前置きの割に女の知恵浅く
前置きの割に中身の無い話
前置きで母に尻尾を押さえられ
年寄りの前置き三年前の礼
浪曲の前置き節へ派手な三味
前置きの話しで寄附と云う予感
前置きはともかく僕にある不満
前置きもなしに娘をくれと云う
前置きですと言えず前置き長くなり
金借りる気だなとおだてにのらず
セールスの前置き視窓に云い
ハガキ一枚これだけ前置き書い
ていねいな前置きお茶も出てこ
前置きが短かく話上手なり
前置きのすんだところ邪魔が入り
金の話なら断ると前置きし
前置きはもうよい理由言い給え
前置きは短く要点書いてくる
前置きが終わったところで水を飲み
本論は前置きほどにうまくなし
前置きで無心に来たと言ひとられ
前置きのあと待ち遠い粗酒粗肴
前置きはぬきで再婚すために来
前置きの内にビールが配られる
前置きの部分も講演料のうち
前置きはせず正直が詫びを言い

隆子
木魚
秀輝
青夜
恵子
曉明
章雅
信二
季贊
千夏
和宏
芳仙
花子
古方
正朗
七面山
白汀
どんたく
伶人
露杖
代仕男
文月
春日
曉童
酔々
国彦
素身郎
鎮也

前置きもなく哀悼も情激す
前置きはこの位でと身を正し
前置きへ心静める咳一つ

千翁
芳子
翁童
静歩
鶴丸

前置きはここの辺にしてソツがない
前置きをして故郷のおすそわけ
祝典の前置き平和の鳩飛ばし
前置きの中に人柄匂わせる
もしももしもよと前置きと話し

宵明
明人

求愛の前置きストロー考える
聴衆の心前置きから掴み

天明

前置略で要件のみも男の子

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 3452104
夜間 4408

初歩教室

——題「急」——

本田 恵 二 朗

初歩教室 など担当する者は、余程の心臓マンでなくては、とてもやれるものではないとスタートした時から、思い続けている私である。柳友の熱吟を、どうのこうのと、つつきまわして、相当にエラソウな口をきくのだから、心臓に毛のはえたサムライでなくては到底やれぬことだと、百も承知しているものの、それへの批判の矢は、かなり厳しく返えってくる。そこへ一つ一つ返答はしないことにしている。と言うのは、この教室の仲間達が、満足してくれたら、協力してくれるという。私にとっては、何よりもうれしいお返しがくるからである。

ここで、仲間達に再確認をして頂きたいことは、私があなたの句を、決して添削していません。私ではなく、私があなたの句を読んで、私の訛りで、言い替えてみたまでのことで、あ

なたの句の方が素晴らしいかもしれず、私の方がうまく表現したかもしれない、又ある時は、あなたの句境と、いささか違ったものになっていることさえある。あくまで参考だと解釈してほしい。私は指導者などと夢にも思っていないし、又その資格に欠ける点が多々あることも知っている。でも、いつも初心を忘れないで、勉強を続けるために、皆などと共によき勉強の場としているのが、この教室である。そして、この教室から柳界の天空へどしどしと羽ばたいて欲しいと希うことしきりである。さて今月のご熱吟と、勇ましく取組んでみよう。

経済の急進家計簿が喘ぎ
（経済の急進家計簿喘がせる） 万 竿
客見えて急なサービス女房の腕
（急な客妻の腕前あわてない） 藤 持
急がれたお式ごもつともど誕生
（急な挙式なるほど九力月で生れ） 千 夏
急カーブするとぶつかりそうな海
（急カーブ衝突しそうな海の青） 保 夫
急ぐのに又一服といやがられ
（急ぐのにまた一服と逃げられる） 富 士
叔母が来て急にまとめた佳い話
（縁の糸急に結んだ叔母の五指） 杜 月
急激の拍手に舞台降りてゆく
（急激の拍手舞台に生きる華） 露 杖

公害も急成長に歩を合せ
（経済成長追い抜き公害はくそ笑む） 頼 次
急げども足は進まぬ夢の路
（夢の路急げば足が宙に浮く） 賛 平
そんなこと急にござん事困ります
（そんなこと急にとハタチの頬を染め） 三十四
急ぎ足迷信受けて試験の神参り
（急ぎ足迷信受けて試験の神参り） 静 子
句意が判り兼ねて、いささか困ったが、私の解釈で詠んでみることにする
（迷信を試す氣玉砂利を急ぎ）
車事故急がぬ旅に急ぐ友
（交通禍急がぬ旅で速き急ぎ） 秀 村
一息のところで信号赤となり
（急ぎ足赤信号にひっかかり） シ ゲ
病み上り急に鏡を見て笑い
（手鏡を急に思い出すほどに癒え） 進
発車ベル急ぐ足どりけしかける
（発車ベル急げ急げとせきたてる） 綾 女
急用があつて老いたる足を知り
（急用が教えてくれた足の老い） 為 二
緩急自在年功人をそらさず
（緩急自在年功人をそらさず） 軒太楼
ボーナスをしつかり抱き帰路急ぐ
（いそいそと家路へ急ぐ初ボーナス） 肖 二
素人の悲しさ結果を急ぎたがり
（かけ出しのかなしさ結論急ぎ過ぎ） 比呂路
急ぐとき陸橋渡る馬鹿らしさ
（急用の足へ陸橋もどかしい） 繁 子

俄か雨ゆっくり急ぐお年寄

(老いの足ゆっくり急がす俄か雨)

救急車今日も人ごとに思えない

(救急車人ごとでない音をたて)

鳥がたつように娘を結ぶ縁

(出雲さん鳥がたつように嫁かせる)

さて以下の句は、私がチョッカイを出さぬ句

であるが、皆んなで鑑賞し合って見ようよ。

急停車紳士の膝で頬を染め

急停車美人が横に居てくれた

前句は女性作家、後句は男性作家であるところ

が面白い。女性心理を、正直に教えてくれ

たばかりか、苦笑させられる。

急行のようにライバルに追い越

父倒る急に前途が暗くなり

渚水

志津

茂美

千寿子

虎城

慶彦

急停車牛も貨車から首を出し

困るなモウーと言っているらしいよ。

急病ということにする二日酔い

急行を時計がわりに野良仕事

救急箱さて要るときにない薬

そんな傷は親の唾をつけたらもう治ったよ。

支度こそそこ心急ぐ里帰り

秋の虫限るいのちを鳴き急ぐ

万博も終り我が家も急に秋

空飛んで来たに病人持ち直し

飛行機で来たのにバスで待たされる

急患へ医者卵が狩り出され

ご近所はまた嫁ったよと母急ぐ

大安の神主朗朗読み急ぎ

急用のはずが喫茶で鉢合せ

和風

露声

花子

利美

誓二

千代

孜孝

春海

秋女

雅号ぶっちやけばなし (78)



都倉求芽

とくらもとめ

国鉄職員(四十一歳)

本名の昭蔵で投句していました。ところが職場の句会でも、川維にも、柳名を云わねていたところ、たまたま当時関西梨園の若手の勉強会で私の好きな優が妹背山の求女を演じたのを、もともと音読より訓読の方が好きなのだから、そのまますいいただきました。ところが字面からくる感じが、どうも不真面目に誤解されているらしい節もあり、私自身も心ならずも追々憂うつになり、このアンケートを機会に求芽と改名させていたいただきたく存じます。心気一転、新しい芽を求めて精進いたしたくよろしくお願いします。

楽しいお買物の夢をおくる

松坂屋の商品券

上野・銀座・静岡・名古屋・大阪の各店
横浜「野沢屋」で共通にご使用いただけます

500円券から30,000円券まで8種類



大阪天満橋
松坂屋
電(06)943-1111

急用を思いいつかせた逃げ口上
急行通過さす出勤の腰をあげ
秋を編む針へ急げとチチロ鳴く
急濡にのぞむ茶店の心太
クーラーの涼しさなどくらべものにならない
新鮮な涼しさがただよう句だ。
大急ぎの夫がガマ口振って追う
指定席なのになせかせかと行く
急坂でさっさと抜いたハイヒール
急襲のような無心におったまげ
救急車わが子の名前呼んでみる
親ところが、いみじくもにじみ出ている
題一去十月二十日締切(十二月号発表)
宛先・岡山県倉敷市下津井三五二七一一
本 田 恵 二 朗

大 萬 川 柳

「美 男」

入選発表

選 者 清水白柳
投句総数 四百七十五句
入 選 六十六句

店員が美男でし寸買いそびれ

男前その上声がしびれさす

いつまでも怪をかじっている美男

ぞつとするような美男で恐くなり

ほめようもあるに親には似ぬ美男

ハンサムが女の領分まで犯し

且さんの嫌う美男のお師匠さん

美男子に惚れたはいが落ちつり

美男子の出るチャンネルが気入る

美男また振り向かれてる夜店の灯

鳥取 露 杖
押売りの端正すぎる顔かたち

大阪 生 長
いつまでも美男で居たい身だしな

米子 千 代
美男でもないにライバル妙にもて

倉敷 恵二朗
菓業服着ると美男になるあなた

大阪 新之助
エリート的美男は恋に遠くいる

倉敷 素身郎
来席の美男へ妓注ぎたがり

大阪 弥 生
女手で真直ぐ育ってきた美男

大阪 庸 佑
うちの娘のどこ気に入ったか美男

鳥取 和 宏
ハンサムのところ父に似ている子

大阪 阿 茶
ハンサムの父に似なんだ女の子

尼崎 利 美
社長より美男で専務気を使い

倉敷 里 風
美男だとおだてに乗せた月給日

倉敷 千 翁
美男子におわす大仏さまでした

鳥取 洋 々
父に似ず母にも似ない美男なり

後藤梅志著

「秀句鑑賞と

梅志句集」

送料共 五五〇円

宝塚 ゆきをを

美男だがあの手の顔にはよう貸さん
美男には懲りてる筈がまたのぼせ

岡山 柳 子
兄さんは美男子神様うらまれる

鳥根 芳 子
美男子が一人も居ないから平和

鳥根 正 朗
モンタージュ美男子過ぎて腹立ち

おごられる方の美男子もてている
孫美男嫁の方には似ておらず

大阪 柳 志
男前でないのでものが云い易し

鳥取 恵 子
髪刈って寝るには惜しい男前

ハンサムなだけで稼がない男
素晴らしいハンサム母の気に入ら

倉敷 扇 水
美男子でないが退屈させぬ貌

美男子が来てグループの和が乱れ

八尾 酔々

業平になって伊勢読む秋の宵

駈落ちの美男と美女の屋台店

堺 一二三

美男避けるおんな悲しい過去を持

うぬぼれを秘めて美男の無表情

東大出のハンサムでいてまだひ

富田林 花 梢

ハンサムの視線にママもふりか

ことさらのように美男の咳ばらい

好きにさからハンサム見えても

大阪 保 夫

ハイミスの目には美男に見えても

妻でさえ美男スターの方が好き

美男もうスキヤンダルなど気とし

佳 句

大阪 水 客

故郷の寺縁ぐハンサムの友送る

高槻 静 馬

美男憂鬱年増ばかりが好いてくれ

米子 千 代

美男ひとりまじり女の旅無口

倉敷 素身 郎

美男子とペンフレンドは思い込み

美男今日もてはならぬ客を連れ

人ノ句

八代 史 朗

美男子のお巡りさんで頼りない

地ノ句

堺 一二三

美男美女過去がありそう露路に棲

天ノ句

高石 好 郎

姉たちに分けてやりたい美男なり

選者 吟

転落の緒口となる美男にて

昭和四十五年度

ベストテン(十月現在)

一 水 客 二四、〇 大阪

二 千 代 二二、〇 米子

三 好 郎 二二、〇 高石

四 素 郎 二一、〇 堺

五 天 笑 二〇、五 堺

六 三 林 坊 一六、〇 倉敷

七 素 身 郎 一五、五 倉敷

八 扇 水 一四、五 倉敷

九 吸 江 一四、五 藤井寺

一〇 一 二 三 一四、五 堺

一一 可 住 一四、〇 篠山

一二 里 風 一三、五 倉敷

一三 花 梢 一三、五 富田林

一四 芳 子 一三、〇 島根

一五 鬼 遊 一三、〇 八尾

一六 柳 好 一三、〇 松原

一七 柳 志 一二、五 大阪

一八 静 馬

一九 惠 二朗

二〇 新 之助

二一 曉 明

二二 美 房

二三 千 翁

二四 利 美

二五 史 朗

二六 ゆきを

二七 鱈 魚

二八 美 代

二九 醉 々

三〇 葵 水

三一 保 夫

二二 五 高 槻

二三 慶 之助

二四 大 阪

二五 大 洲

二六 大 阪

二七 倉 敷

二八 尼 崎

二九 八 代

三〇 宝 塚

三一 岐 阜

三二 富 田 林

三三 八 尾

三四 和 歌 山

三五 大 阪

九〇 堺

九〇 大 阪

以下略

昭和四十五年度第十二回(最終回)

「急 所」 五句以内

締切 十一月二十日

昭和四十六年度第一回

「切 手」 五句以内

締切 十二月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五十六

郵便番号 五九二

川 村 好 郎



ライオン ジェットペン 福井商事株式会社



新芯気鋭
いつまでも細く書ける硬質サインペン
黒・赤・青
1本50円

柳 展 望 界

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼ふあうすとの故相元紋太先生の生前の文化功績に対し、八月十二日銀杯が下賜された。

▼川柳研究社では昭和四十六年度から川柳研究年度賞を設定。作品は川柳研究第一・第二吟家から選衡される。

四の三十四、尼崎市立中央公民館記念文芸祭係宛。

▼丹波太路句集「傘寿」発刊記念句会は九月二十日大阪府教育会館で開催されたが、本社から清水白柳氏が兼題選者として出席、羽原静歩、香川酔々の諸氏と薫風が祝意を表した。

▼第三回柳都文化祭川柳大会は十一月八日(日)正午から新津市本町の老人憩の家で開催。

▼柳宴十月月号は誌齡二百号を迎え昭和四十五年十月一日発行になった。

▼噴煙二十周年記念川柳大会は大島濤明主宰追悼を兼ねて十月四日(日)午前十時から熊本市社会教育会館ホールで開催。

▼岡山市芸術祭市民文芸祭は十一月一日(日)午前九時から岡山市立青年の家で開催。映画講演分科会などが催される。

▼川柳塔「わかやま」と和歌山番交交流川柳会は十一月十八日午後六時から和歌山市小松原通五丁目電停前垂井ビル一階ホールで開催。兼題、急停車(保田吉彦選)。兼題、急停車(保田吉彦選)。兼題、急停車(保田吉彦選)。(一題は互選、一題は津選)旗(清水白柳選)指切り(金泉万葉選)席題二題、(一題は互選、一題は垂井葵水選)、各題三句。

▼中島生々庵主幹夫妻は十月九日から令息の渡米の報

▼川柳さっぽろ十月月号は一五〇号大会特集号として十月一日発行。生々庵主幹は選衡委員として雑詠吟の特選句は「ちっぽけな器の自尊心」坂井芳太郎。

▼尼崎市立中央公民館新館落成記念文芸祭(川柳・俳句・短歌)は十一月六日(日)午後一時から市立中央公民館三階で開催。「雑詠」二句選者は石立不折、橋本言也・福島郁三・萩原金之助・伊東静夢・海士天樹、投句は葉書に「川柳」と朱書、十一月十四日必着で、尼崎市西難波町六の十

▼「川柳浄瑠璃志」が東京都中央区日本橋室町三の三近世風俗研究会から発行になった。著者は大村沙華氏。限定五百部、A5横本、特選和紙二百六十頁、定価四千円、送料二百円。

▼谷野花峰遺句集「花峰」が岡山市津島岡大官舎、川柳岡山社から発行になった。昨年九月十八日七十六才で、服部十九平氏と同じような交通事故で死去された遺稿から、中永智遊氏が編集されたもの。B6判九十四頁、定価百円。

▼柳宴十月月号は誌齡二百号を迎え昭和四十五年十月一日発行になった。

▼噴煙二十周年記念川柳大会は大島濤明主宰追悼を兼ねて十月四日(日)午前十時から熊本市社会教育会館ホールで開催。

▼岡山市芸術祭市民文芸祭は十一月一日(日)午前九時から岡山市立青年の家で開催。映画講演分科会などが催される。

▼川柳塔「わかやま」と和歌山番交交流川柳会は十一月十八日午後六時から和歌山市小松原通五丁目電停前垂井ビル一階ホールで開催。兼題、急停車(保田吉彦選)。兼題、急停車(保田吉彦選)。(一題は互選、一題は津選)旗(清水白柳選)指切り(金泉万葉選)席題二題、(一題は互選、一題は垂井葵水選)、各題三句。

▼中島生々庵主幹夫妻は十月九日から令息の渡米の報

▼柳宴十月月号は誌齡二百号を迎え昭和四十五年十月一日発行になった。

▼噴煙二十周年記念川柳大会は大島濤明主宰追悼を兼ねて十月四日(日)午前十時から熊本市社会教育会館ホールで開催。

▼岡山市芸術祭市民文芸祭は十一月一日(日)午前九時から岡山市立青年の家で開催。映画講演分科会などが催される。

▼中島生々庵主幹夫妻は十月九日から令息の渡米の報



金露

灘を支える
味の味

清酒

キンロ

金露酒造株式会社

乗お尻が寒くなり「また、鷺羽ライオンズクラブのメンバーである氏は「鷺羽L・Cの歌」を作詞、滝弘太郎氏の作曲もなり、レコードに吹き込まれた。(歌詞は次号で発表)

▼岡村久志良氏(岡山県同人は、同郷の久米雄氏が路郎賞を獲得したので二賞発表句会に出席したかったが、戦没者慰霊祭とかち合、遺族会長としての公用のため欠席は残念至極と。

▼笠戸大橋完成記念・近県

お疲れさま! さあ、アリナミンAです……



健康と心をつなぐアリナミンA

効能 = 疲労・神経痛・筋肉痛・眼精疲労(調節障害)

川柳大会が山口県下松市大手町市民会館で十一月二十三日開催。総理大臣賞は多くの賞が出ています。

▼米沢曉明氏(大洲市)は認定職業訓練の会(中国四国ブロック)で山陰の旅に出られ九月十八日松江から句信を寄せられた。穴道湖は静か、静かに舟がゆく

▼藤原秋月氏(岡山県同人は九月十二日、十三日の両日、二十年前の車掌の同期のサクラと伊勢路に遊び、夫婦岩、伊勢志摩スカイライン、内宮外宮参拝、そして千年の神杉に戦時中を思い出した感無量であったと。

▼森田布堂氏(鳥取同人)から「万博の帰途本社句会に出席。翌六日は奈良見物七日は大阪市内を見物して帰鳥。また今年一月から発願していた開山堂建立も植家の協力で新築完成、八月二十八日入仏落慶式を修行ほつとしてお祈ります。」

▼八木千代さん(米子市同人)は九月九日高野山から便りを寄せられた。「二組の初老夫婦同道で奈良の古寺も訪ね、こんどの旅は万博の人混みをさけた静かな関西の旅で、織田信長の墓にも同向された。なお九月

には葉氏や一三夫氏に会い十一月初旬か、来年四月ごろには一三夫氏と葉子さんにぜひ春か秋の大山をお見せしたいと。

▼山内静水氏(竹原市同人)は国鉄永年勤続功績賞受賞記念を兼ね十一月七日午後七時から静水居で開催。なお静水氏は呉線電化に伴い九月二十五日、国鉄当局的勧告を快諾、当分は国鉄に籍があるのがせめてもの慰めである。

▼林瑞枝さん(米子市同人)から、「山陰川柳大会の当日、西尾葉先生や薫風さんがいらつしやるなら女学校の同期生会の誘いを断って句会へ出席しますと。」

▼高橋鬼焼氏(広島県同人)は退院して三カ月、やっと痛い方の足を地につけることが出来るようになったが、まだ松葉杖を離すわけにはいかずにお祈りしています。

▼有信新之助氏(大阪市同人)は九月十三日(日)愛車を馳つて弓削の西日本川柳大会に出席、往路麻生路郎先生句碑を弓削駅前を訪ね深い感銘を得られた。なお同氏宅に電話開通。35

8・4170番。

▼河内天笑氏(堺市同人)は堺市堀上緑町二丁九の二へ転居。

▼小島蘭幸氏(竹原市同人)は九月一日付で竹原郵便局保険課へ再就職された。

▼第二四回市民連絡協議会の会が堺市文化団体連絡協議会主催で十一月十五日午後一時から、堺市教育会館で開催。柳話「関西と武玉川」堀口塊人先生。兼題は「ガラス」薬介選「夫婦」今雨選「すし」左久良選「公害」

▼早川右近氏追悼句会が十一月八日、横浜市西区藤棚

二ノ一九七、桜蔭会館で開催。

▼永松道雄氏(熊本同人)は病氣静養のため、熊本県八代市古城町二七八二の七一へ転居された。

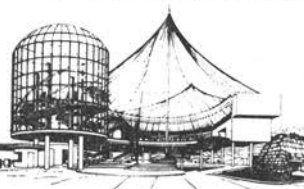
▼西いわを氏(大阪府同人)は長い療養生活から健康をとりもどし、めでたく退院された。

▼弘津柳慶氏(出雲同人)は不二田一三夫氏が松江にいる恋人に逢いに来たことを知り、緑之助氏と目尻の下がったところを見に行く計画をしたが、新人社員の入社試験で会えなかったのが残念だったと。

宝塚

ファミリーランド

世界で初めての立体動物園や、650体の人形が歌い踊る「世界はひとつ」大人形館、スリル満点のジェットコースターなど、楽しさがいっぱい!



阪急電車宝塚駅下車 入園料…180円・90円

45年度 川柳塔賞 発表句会

—— 同 会 場 で 同 人 総 会 ——

とき 10月4日 ところ 以和貴荘

結婚シーズンの日曜日とあって、以和貴荘には花嫁姿が階上に階下に、まことにほほましい雰囲気があった。こ

ちらは二賞の発表というめでたさで、これまたすがすがしいこと。

まず四時近くに同人総会が開かれた。式次第の紙が和室の中央に貼られ、その下には黄菊、白菊の花瓶とならんで二賞の記念品がサンと輝いている。

第六回川柳塔社同人総会式次第

司会 西尾 栞

一、開会の辞

(あいさつ)

中島 生々庵

一、議長選出

一、経過報告

一、会計報告

一、役員改選

一、本年度事業報告

一、質疑応答

一、閉会の辞

生々庵主幹が、あいさつのなかに川柳塔の

前向きの姿勢を示めされ、経過報告の白柳氏は、各地へ出向き、地方同人との交流もスムーズにいらっていると、主幹同様力強い報告があった。

会計報告の多久志氏は、赤字は同人誌の宿命であるとして、のんびり報告されるあたり川柳塔の強みというべきか。

役員改選は満場一致で留任と決まったが、こんごの理事会の活動をさらに強力にするため、元不朽洞会理事長、現理事の西尾栞氏を副理事長にこれまで満場一致で推選した。

質疑応答には多久志氏が起れたが、生々庵主幹は来年の路郎忌は七月十二日に南御堂会館で川柳大会を計画され、その一端をのべられた。

早くから理事会で議題にのぼっていたことだが、改題前の「川柳雑誌」の通巻号を継ぐむねを白柳氏から報告があった。

これは故麻生路郎先生の遺された四六〇号の金字塔を守る意味がふくまれているのである。号数だけでハクをつまようなど「老舗」崇拝ではないこと云々までない。来年度からこれを実行する承認を得た。

副理事長が三本の矢になった。来年の新年号は五二四号となる。

六時から幹事諸氏の活躍で同会場が直ちに回わり舞台よろしくここに四五年度二賞発表句会の幕があく。

遠来浜田久米雄・野田素身郎氏の路郎賞受

賞者をはじめ、横山一声氏、川柳塔賞準優秀作の岡元春昇氏は「たけはら川柳会員」にあり、そのため広島から駆けつけた御大山内静水氏など二賞発表句会の熱気が会場を包む。生々庵主幹の力強いはげましの柳話がすむと、それぞれ古豪新人の受賞者が頬を紅潮させて主幹から記念品を受ける。拍手が祝砲のように場内を圧するあたり二賞発表句会ならではの賑やかさである。

久米雄氏が来年句碑を建立されることはご承知の方もあるとおもうが、その刻まれる句が受賞句にかえたことが氏から発表された。久米雄氏のために祝電が各地から寄せられたのも氏の川柳活動の熱意をそこに見たようであった。

本年の受賞者は万国博と共に永久に忘れられない七〇年となる。おめでとう。

さて、十一月句会の月間賞杯は本多柳志氏の作品に輝いた。(河井庸佑整理)

出席―文秋・与呂志・酔々・新之助・素身郎・水客・圭井堂・多久志・静馬・鶴声・菜

いさむ・静水・一三夫・白柳・虎声・古方・久米雄・一声・万的・春果・凡九郎・双葉・小松園・葵水・太茂津・生々庵・柳志・季賛

滋雀・葛城・響二・野歩・恒明・花梢・摩太郎・形水・明陽軒・野迷路・修史・好一・二

三・一舟・作二郎・冬二・阿茶・徹舟・鶴翠・肖二・綾女・柳太・金三・夢成・筑前・維

久子・トメ子・鬼遊・儀一・凡吉・弥生・天笑・智子・君子・河産・勝晴・庸佑・喜風

つき子・一治・牧人・葉子。

席題「連休」

山内 静水選

連休へ妻久びさの紅をぬる 修史
親孝行のまねごとをする 連休日 恒明

連休へ国鉄さんの胸算用
日直も修業連休棒に振り
とも共に連休明けの二日酔
ぬるま湯の愛連休へ引きだされ
連休を雨でいただく興行街
へトヘトになって連休戻って来
連休を流し目に見てケセラセラ
連休の夫婦へ故郷の母が着き
招かざる客に連休居座わられ
連休もブラン倒れて暮れかかり
人間のぬけガラ連休明けの貌
連休で来れば彼女の方も留守
妻の座に坐り連休にある思い
超のない女になっている連休
連休を故郷で見合はせられる
連休をビジネス街はひそといる
連休を小さな義理がまつている
連休の幹事そろそろグロッキー
連休に葬儀委員長たのまれる
連休へ花壇の模様しこし替る
天高く連休読書しておれず
連休の一日過去を整理する
画心があつて連休旅にのる
連休へもう少し青い稲を刈り
連休を妻に済まないところで
徹一 白鬼 春 天 生 静 冬 葵 夢 凡 柳 勝 春 君 冬 小 栗
舟 声 柳 遊 笑 笑 庵 歩 二 水 成 九 郎 太 晴 巢 子 園

社 告

西尾榮氏が川柳塔社の副理
事長に就任されました

連休を妻に先手を打たれたり
寝て起きて食って連休楽しまん
俗塵を避けて連休写経する
本当の散歩で連休終るなり
如何にせん連休へ一つかない身体
葛城 牧人 圭井 古方 静水

席題「すき腹」

本多 柳志選

すき腹で帰る夫のたよりなし
すき腹へサンマの匂いこびりつき
繁昌の裏でだんごの酒を酌む
すき腹に限度があつたあぶら汗
空腹へ見上げる柿が赤く熟れ
すき腹へ女我慢のコンバクト
すき腹に地階のカレー筒抜ける
すき腹へカメラを入れる順待ち
腹の虫すいていますと鳴り始め
容姿端麗すまして居れぬすき腹
すき腹をかかえてかえる秋の路
すき腹理性失うほどでなし
すき腹の子に夕はんが待ち切れず
すき腹が段々無口になつてくる
すき腹と知らずにお茶であしらわれ
すき腹へ秋空高く澄み渡り
すき腹が拒絶反応しだすメニ
空腹の弱さへ芸を仕込まれる
すき腹の足をノルマに引張られ
すき腹のデパート歩巾が揃わな
すき腹の素うどんの腹がなり
影法師も腹のうどんの腹がなり
人生暮色素うどんの腹がなり
空腹に耐えて育ちをうかがわせ
久米雄 恒明 冬米 筑前 弥三 圭井 摩天 鶴声 柴庵 阿茶 庸佑 花舟 牧人 君河 滋子 素郎 新之 河水 柳志

兼題「祝杯」

浜田久米雄選

祝われる下戸は杯もったまま 阿茶

祝盃のこんな骨身にしてみるとは
祝盃へ精一杯に背のびする
言葉にはならず祝杯あげるだけ
祝杯は並々としてつきこぼし
金婚の祝杯妻の瞳を拝み
当選の祝杯を待つ逮捕状
飲めぬのも祝杯だけぐつとほし
乾杯へ飲めぬ盃上げてる軍歌
祝杯へ俺とお前の知てくる
祝杯へ手ぶらでやってくる友情
名指しされたその祝杯に汗をかき
祝杯のたつた一人が横を向く
祝杯へ嘘がスラスラ言えまじく
祝杯になみなみ飲んだ黒田節
祝杯へ涙もろさをさらけ出し
祝杯が伊勢音頭になる普請
勝つたからだ祝杯になつただ
祝杯の帰りの血圧など忘れ
祝杯を持てば血圧など忘れ
祝杯をひとりで挙げて心満つ
祝杯の主役となつたボーイズと
祝杯へ眉まじしゅうさし上げて
祝杯の機嫌を家へ持ち帰り
祝杯をおつちよこちよいがつきま
祝杯の隣は残念会がしき
祝杯へ借着の袖が短かすぎ
祝杯を赤旗振つた手で挙げる
二次会になつて祝杯らしく酔い
晩酌が祝杯になる電話ベル
祝杯の音頭を孫がとつて渡す
お祝のさかずき妻の手に渡す
祝盃は上る細い手が太い手が
久米雄 水客 古方 生志 多朗 正身 柳郎 素身 春果 静歩 一三 水客 素身 勝郎 庸佑 恒明 凡吉 作二 弥郎 醉々 鬼遊 一だ 儀一 河産 花梢 鶴声

兼題「アイデア」

清水 白柳選

アイデアに異色をはなつ包装紙 祥月

アイデアマンと言われ家業にちがひ向き
天井を見てもアイデアわいて来ず
絵に書いた餅をもち寄る会議室
老舗からみればアイデア飛び放れ
娘のアイデアに父日曜を盗まるとん
アイデアマンなどと盛ではうとん
アイデアの出所女房とは言えず
アイデアの要らない妻が肥り出す
金になるアイデアで無し聞いておく
アイデアを里の母から借りて来る
アイデアを生みだすコーヒ熱くする
アイデアで出来たわびしい無人駅
アイデアを買うよとボスのさり気
アイデアの気分を交えに席を立ち
陶工のアイデア冷めた茶を吸る
派閥ありよいアイデアも入れられず
鼻唄がとまりアイデアまた浮び
けちんばのアイデアどこかじむ
アイデアをメモするものがトレ
白底の暮しアイデアだけは持ち
白状をすればアイデア裁ちそこね
アイデアが切れたら社員養えず
恵まれぬ椅子アイデアのない男
アイデアをくどくど述べて金を借り
すがらがふえるアイデア出ない
アイデアかまた作り出す欠陥車
切角のアイデア妻にくさされる
アイデアをほめて予算のことにふれ
つまづいた途端アイデアとんで出る
アイデアは崩れ爪跡だけ残る
アイデアの目でアイデアを計算し
アイデアに鉛筆のちもある如く
アイデアが浮んだ煙草もみ消され
素晴らしいアイデア母をまた騙し
アイデアのいらぬ千羽鶴を折る

いさ 静馬 志馬 柳堂 夢井 圭成 水客 虎声 小松 作郎 静歩 夢成 河産 水客 金三 作二 阿茶 花笑 素身 春果 静舟 牧人 勝晴 鶴翠 鵜郎 摩郎 栗方 古庵 生々 滋園 小松 滋園 冬陽 二雀

握りつぶす気のアイデアを賞めて
アイデアが浮び階段踏みはざし
アイデアの通りに行けば蔵が建ち

兼題「運勢」
若本多久志選

運勢を変えに仲人来てすわり
それからは運勢欄をのぞく癖
運勢を開く鍵持つ心意気
朝寝坊運勢欄だけみて出かけ
上げ潮の運勢運に運がつけ
ボス或る日こっそり運勢見ても
婦唱夫随五黄の寅を妻として
松下はんと同じ手相でどや暮し
運勢に無理をしないうで来た寿
運勢も下を向いて金詰り
運勢が気になりかけて年不惑
どん底で次の運勢待つゆとり
運勢を信じ大器のまま枯れる
つまづいてからの運勢気になら
おみくじの運勢は凶恋すすむ
なるようになさ運勢に逆らわす
こっそりと娘の運勢をみてもら
人生のたそがれ易の灯にすがり
ご自分のもろさを運勢にしてひがみ
運勢を唇になだめられて生き
そんな時運勢欄を見てる恋
石仏にさえ運勢があり花の数
運勢にそむきはじめてる辞表
泣き笑いして運勢に踊らされ
吉運か神の助けか持ち直さず
人間の弱さ唇がよく売れる
停年へ大器晩成まだ信じる
会心の成果運勢信じた信じる
運勢に背を向け生きる汗をふく

修虎 鬼夢 勝誓 一冬 万夢 文生 修双 徹微 冬つき 滋弥 春牧 どんたく 牧扇 章軒 藤芳 正朗
史声 遊成 晴二 治二 的成 秋庵 史楽 舟二 雀生 果人 水雅 太樓 持子 朗

花水のように運勢見すかさ
運勢はいつのあやうともついで行く
運勢の強い手のひら荒れてる
運勢を強気の妻が盛り上げる
運勢もあなた任せで妻となり
運勢は唇とみくじ食い違い
残された運勢賭けてみる手術
良く言ってくれた八卦が好きになり
運勢はどうあるうとも鯉職
消えそうな星の父だが消えない日
占いの前に手を出す失意の指
根性に運むいて来た太い指
愛に背むける運勢悔いて寝る
運勢を神にも頼り足るを知る
運勢に逆らい長生きしてしま

一三 水客 葵陽 明好 柳太 素身 鬼遊 太津 綾女 葵生 弥風 滋雀

新春ユーモア特集の規定は64ページ
を御覧ください。

営業所
阿倍野店
堺吉店
住野店
平島店
都福店
今三店
十条店
九条店

crcdit system

丸越

月賦百貨店

本社 大阪市阿倍野筋3-15-1
TEL 632-3806 3807

逆境の岐路運勢に目をつむり
平凡な運勢を夫の背に委ね
おみくじの凶を仁王にたきつけ
好運をママははくろのせいとい
雲を呼ぶ童だと男奢らされ
改名をして運勢へ立ち向い
十円で買った運勢当にする
運勢は汚えず名を変え印を交え
ひのえ午うたら運が向き初め
運勢は努力の後へそと来る
一筋の道善人にして遠い運
福耳を撫でてどん底たえて
片足ですんだ運勢喜こばれ
多笑天花葛一文筑柳醉明
久笑梢城秋前志陽軒

兼題「名言」

北川 春巢選

一浪は座右の銘を書きかえる
タイミングよい名言にかしこまり
名言集ひらいて欲がすてきれり
何気ない一言名言にされた地位
どたん場にきて名言がよみがえり
名言を成る程あと座右に置き
名言を借りスピーチの結びとす
名言を座右に浪人挫けない
実行もせぬ名言の額をあけ
俗物として名言を受け止める
社長の一と言名言にする社内報
のんびりと言名言もふたむかし
政治家の信念名言はいたのみ
名言を吐いて孤高の道を行く
愛誦の名言或る日つきささり
愚を悟る日の名言が胸に沁む
名言を隠して聞いてすぐ忘れ
次々と名言の出る披露宴
背延びする名言だから鼻につき
名言にどん底の身を励まされ

名言を吐いて議席の隅に居る
武者小路の名言が好き世がたのし
名言ですねと社長をよろこばせ
国境を越えて名言伝えられ
名言を背負った父のかたくな
名言をはいたが後は酔いつぶれ
仲直りさす名言を孫が吐き
母の名言無理しなや無理しなや
名言を商魂チャッカリ借申し
とときの名言先の人が言い
都合のいい名言を妻見つけ
名言を疑う程に金を貯め
名言を裁判長はひとつ持ち
静馬明陽軒一三夫虎声智一子
柳素身郎春巢志

▼柳界短信▲

▼神谷凡九郎氏（大阪市同人）は豊中市民川柳大会の兼題の選をされた。
▼岸和田市文化祭参加第二一回市民川柳会が十月二十五日、岸和田市民会館地下ホールで開催された。挨拶を高橋操子さん、柳話を川村好郎氏。兼題選者に内藤さき子さん、清水白柳氏、高橋操子さんほか。
▼三太郎忌（三回忌）句会は十二月二十日午後一時開催。兼題：ころろ・豆腐・幻・牙投句十五日締切・百円封入。東京都台東区下谷の二九の九、松井清志宛。
▼玉造川柳会・十一月十日（火）午後六時。
▼玉造交差点南百米・大阪信用金庫。
▼南海川柳会・十一月十九日（木）午後六時。
▼南大阪川柳会・十一月二十日（金）六時。
所・ナンバ高架下、親和クラブ。
所・飽き性・年輪・手頃・大声。
所・松崎町二丁目、以和貴荘。

▼橘高薫氏は十月六日急拠大阪厚生年病病院へ入院、目下胃の手術をするため種々の検査をはじめている。八日に東京のホテルオークラで挙げられる柳人藤巻昌子さんの結婚披露宴へも止むなく欠席、楽しみにしていた山陰川柳大会へも不参加になってしまった。六日八日、中島生々庵主幹のお見舞いを受ける。院長に面接病状を聴取して下さる。深謝。すつきりしてまたお会いしましょう。（三三一号室ベッドで）

▼藤井明朗氏（島根同人）の還暦記念句会が十一月八日（日）午前十一時から木次町体育館洋室で開催「兼題」喜び、明朗選「熱燗・一保選」手ごろ・祥月選「前むき・緑之助」暦・水客選。席題三題・会費八百円（写真・昼食・小宴共）投句締切十一月五日、百円封入島根県木次町新市、むらくも川柳会。

とき 昭和四十五年十一月十五日

ところ 午後一時開演
大阪市東区長堀橋筋一丁目
福德相互銀行本店八階ホール

第三回 奇術発表会

（入場無料）

主催 関西奇術教室

校長 村田瓢太

小池 鯉 生 著

『残照』の感動

橘 高 薫 風

人に宿命があるように句集にもそれがある。

小池鯉生著「残照」も奇しき縁の下に生まれ出た感を深く抱かせる句集の一つである。著者生涯の師と仰いだ房川素生の急逝によりその序文は得られず、病床の楳元紋太が代って書いた。序の中の、「彼（素生氏）の代りになる人を、ちゃんと私は得ていたからである。それは誰かというところ、この句集の著者、埼玉浦和の小池鯉生君である。（中略）私は素生君に会いたくなれば鯉生君を見ればよいのである。」の一文は、句集出版に先き立つて数多の柳人に深い感銘を与えたものである。そして、句集出版そのものも、紋太の死に間に合わず、五月五日の紋太告別式の前日によくやく霊前に捧げられたのであった。著者の来し方は波乱に富んだものであった。その境涯に即して、刻々、刻まれ続けた句の集

大成は読者に強い感動を呼び起こす。句集を読んで、居ても立ってもおられなかった一女流柳人が、泣きながら鯉生居を訪ねたという事実もそれを裏書きするもので、作者の気合いと序文の気合いと、読者の気合いが、一つの直線の上につながり結びつくことの出来る見事な出来栄を、この句集は示している。随筆の一つに路郎の句集「旅人」のことが出てくる。

（出逢い）

私の書架に路郎師の「旅人」がある。亡母の故里を出た翌早朝東京駅に着いた。三十数年前の土地感を頼りに、中野区の川上三太郎先生の門を叩いた。川柳だけが頼りの一人旅であった。句は見て戴いてはいたものの初対面、上京の訳を簡単に告げた。朝食を出すようにと八千代夫人に言われ「わたしは急ぎの原稿があるから」と二階へ上られた。味噌汁が温く嬉しかった。一休みしなさい、と言われて炬燵にあたっている中に車中の疲れから寝入ってしまった。昼近く眼を覚ました。都内に門下の多い周魚に逢え」と言われた。

辞去しようとして玄關脇の書棚に「旅人」が二冊あるのが目にとまった。路郎先生には鳴尾に住んでいられた頃教えを受けたことが思い出されて「二冊ありますね」と言う。「一冊持って行け。今は手に入り難いそうだから」代価は受け取って下さらなかった。私

は近頃句集の発刊を知る度、心ひかれる人のものは二冊以上需めることにしている。この時三太郎先生から受けた御厚志が忘れられず、又その時、これは私の一生見ならうべきことだと感じた故もある。人の心は斯うして人に伝えるものだとも思う。

実にしみじみとした文章ではなからうか。文章のどれも著書の心と読者の心とが通じるのである。私は路郎の句や風貌が好きであった。白石朝太郎・大島無冠王・中野懐窓といった作家の句や風貌も好きである。句にしゃんとした背骨が一本通っている感じで、容姿もひきしまつて厳しいのである。句も身体つきも、ぶよぶよとした贅肉のないのが好ましいのである。小池鯉生もそのような作家の一人であると思う。著者は大病を再度克服されたの作句活動なので、いやが上にも自愛を専一にされて、一きわ重厚な句境を押し進められるよう念願する次第である。

落魄と言う字は白く書くものか
仏にもある取巻きの烈しさよ
しゃれくさい遊びを忍びる床の虎
善光寺七味一軒そば百軒
九ツは仲居に呉れる太鼓焼
金色の蜘蛛の巣よろし手術熱
病無聊意匠較べの鳩を呼ぶ
寝汗して師の告別を果したり
智恵のない子を呼ぶ声で犬を呼ぶ
切株の動くが如く師をおもふ



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。結切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

たけはら川柳会

小島 蘭 幸 報

第十三回近県川柳大会入選句

肩の荷の重さ男の登り坂 泉
呉服屋の奥さんの肩借りて選り 宏
風船が頭で割れた肩車 里
肩替り男勝りを見直され 清太郎
祭日の旗へ物干竿を借り 秀宝
朝がおの小さい生命がからむ竹もとる
七夕の竹に会話がある平和 止水
陶工の青春竹べらに賭ける 紫光
火と燃えてそれから憎いこともあり 鬼遊
寝たきりの一人を守る火を埋め 桃里
青年に次元のちがう火が燃える 富子
戦争は知らず熔鉱炉の烈火 恵方
清貧を誇る真赤な嘘である 明
誇りみな捨てて名刺が小さくなり 潮音
俺が磨いた機関車が車庫を出る 義次
勲章は玩具でもよし胸を張る 鬼遊
コーヒーとケーキ昔の恋でした 白村
幸運は逃がしてばかりいた昔 無門

反戦歌むかしが重くのしかかる
昔ここに歌人が立った歌碑が建つ
声かけて無心の姿こわすまい
男を灼くボーズ九月の海鳴りに
うしろ姿が何かに耐えている父で
一とときの老いを白髪が釘づける
足だけを見せ片言の傘歩く
アーケード途切れ途切れに傘をさし
おコートをつくれれば似合う傘がいろいろ
見られたくない顔傘の向きを変え
お茶一つ重い空気を和らげる
意識して運ぶ見合の茶がこぼれ
一ぶくの抹茶さとした顔でうけ
働らき手四角四面の茶へ縮み
乾き切る土の軽さを風が知り
合掌の姿で大豆土を割り
美しきものみな土に根をおろし
人知れず大地を慕う水中花
廻りみな敵と承知の後を継ぎ
あと継ぎはコンピニーターに社運
あとついでみて素晴らしい父だった
一度は破門恩師のあとを継ぐ
南大阪川柳会 金井文秋報
チビッ子親の果せぬ夢を賭け
薄幸の余生に神の手引さ知る
気兼ねなく使える金をとるパート
同族としてボナススへ気兼ねする
成金が精一杯にかけた手間
親善の名にかくされて居たスパイ
手間かけた自信で閉じるコンパクト
手引書でママいつの間か株覚え
観正一 恵方 日出雄 一高 好啓
桃里 桑宝 秀子 丙午郎 清海 春昇 泰人 文庫 鬼焼 清紫 千翁 伯峯 正一 蒼雲 政己 静水

愛情があるから盆栽手間でなし
値切られて見えなくて手間を抜き
手間かけた和服に母の血がにじむ
外出も嫁に気兼ねをする同居
恋心あつて手引の灯をかざし
親善の仮面へ乾盃させられる
へんくつならこそ手間ひま惜しま
お茶漬へ気兼ねないのが借りに来る
親善の握手両手で握りしめ
邪心ない恐さチビッ子さんの眼
チビッ子が来襲してから皆狂い
篤志家の善意チビッ子広場です
手間かけてすまぬと志握られ
売薬のどれが効いたか癒えかかり
納税の手引き辛いとかまで手が届き
親善の結果混血児がのこる
親善の公費で名所見逃がさず
手配師の手引きと知らず来た飯場
先輩の手引きと知らず昇格し
玉造川柳会 西出一栄報
おみくじの和歌の教えがのみこめず
高級な花瓶は箱に仕舞うとき
幹事の目席の配置を改める
肩書を取ればすっきりした名刺
人間の広場で太陽疲れてる
ライバルの眼が光ってるメガネ越し
光るもの皆美しき試歩の朝
ホンモノのダイヤが光る指で酌ぎ
眼底に淡い光がよみがえり
影という演出ありドラマ持つ
光消えて女哀しいドラマ持つ
智秋子 文風 好郎 古方 小松園 儀一 静歩 金三 凡九郎 凡九郎 六龍子

夕立が去って地蔵の耳光る
同窓会姿勢くずして若返る
確信があるから胸を張る言葉
紙幣見せる姿勢で払ういやらしさ
いかり肩姿勢が男舞いに向き
男女とも猫背の多い過疎の村
参観日うちの子こんなによい姿勢
姿勢正しても人氣は落ちていた
も姿勢シヤット切るまでじつと
神主は姿勢を正す笏をたて
釣り上げるまでの姿勢のやわらかさ
負けと見た探み手の俺の影法師
日の丸へ姿勢を正す子に育て
気がついたら癖になっていた姿勢
あととは自弁応急処置をうけ
これからは自弁ですよと区切りつけ
少年の夢は捨てない貯金箱
二次会は自弁だからと断れず
身銭切る酒は云いたいことが言え
川柳たましま 水粉千翁報

葵水 芳子 滋雀 静馬 章雅 風仙洞 富久一 鶴声 綾女 儀一 舟一 あいき 古方 小路 照一 好一 一二三 昇二 鼓草 三林坊 扇水 澄子 安静 麗水 郁恵 朝二 柳子

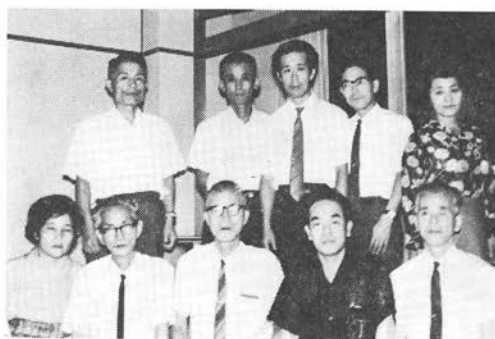
早起きの癖も頑固も父のもの
雷鳴へその夜の誤解とけぬまま
不倫ではないかとサンダルに聞かれ
交番で泣いて帰った出来心
早起きが得にならない時代なら
備前川柳社 合同吟行 目賀芳月報
後楽吟社
湯の街の夜風へ何か期待する
山脈のむこうの海が鳴って居り
話いさざとぎれて瀬音なお涼し
うれしさがあふれてコンパクトも笑い
湯上りの肌は更年期と見え
あふれ出る湯へ極楽はここにあり
湯上りに寡婦の化粧の念がいり
呑まれた煮湯それから人変り
寝返りを打てば湯の宿妻がいず
湯の里で育ち都会を恋しが
公害を逃れ河鹿の湯に浸り
公害を逃れのびのび湯につかり
コップ酒屋台の湯気が顔をなで
湯煙りが防犯灯をくもらせる
湯の街の浮気きれいに洗って来
冷房をして暑中見舞を出し忘れ
玉の汗流す芸妓の目が涼し
長寿法にんにくくさい息をはき
長寿法とかくんのびりして暮し
妹をすこし待たせたコンパクト
化粧室くやし涙をパフで消し
山脈を越せば言葉もわかりかね
金のある人も裸で湯に入り
女湯のレモンは誰れに夜におう

三林坊 秀子 林鶴 里風 隆三 鮫虎狼 幽谷 柳月 芳子 胡風 正州 三与子 古心 古心 水仙 雅子 文女 哲郎 綾子 一声 秋月 宗路 照郎 幸仙 久米雄 芳明 君子 白黒 鉛坊

「親こころ・子心」
送料共 二六五円
「老いの坂」
送料共 五二〇円

橘 高 薫 風 著
「れ も ん」
〒 共 五〇〇円

もう一度若うなりたいコンパクト 万女
いずも川柳会 尼 緑之助 報
冷汗が脇を流れる 好奇心 軒太楼
とつぷりと暮れた場末の遊園地 祥月
郷愁は地蔵へ夕日落ちる景 柳慶
口車にのっかって見る 好奇心 白楊
夕方になれば噂の人が行き 河南
風雲にせかれ馬力の出る日暮 緑之助
南海電鉄川柳会 (大阪市) 辻圭 水報
欠陥車のろのろとどろろつき 東雲楼
欠陥車知らぬが仏の三カ月 柳信
技術者の未熟も言わず欠陥車 八郎
マイカーが欠陥車とは買ってから 宏子
税金だけは一人前の欠陥車 双郎
欠陥車と云うて親父に出さず腹 摩太郎
ボスターに美女さつそうと欠陥車 貴山
電柱でやつと止った欠陥車 天笑
掘出し物とささいかけてる欠陥車 清涼
欠陥車以来新車へだまされず 金三
ウイロー社 (ハワイ)



松江・レークガーデンで、前列左から芳子、緑之助、祥月、一三夫、正朗・後列左から清泉、孤呂二、鶴丸、明朗、紫諸氏。〔明朗氏撮影〕

見えずに細工に腹を探られる
焼物の底へ裸身の美女を秘め
国宝となって細工が世にうかび
小細工がばれて云い訳考える
小細工をこそしても出世せず
落選をしても妥協の細工する
老の趣味心を満たすだけで足り
趣味問われまさか女とも云えず
齢八十悔なき生命蘭の花
人柄の床しさ趣味で見直され
和歌山短詩型文学クラブ 中筋三幸報
名案はこゝらで手打式にする
名案も既に社運の間に合わず

無いちエの最後は神へ頼みけり
子沢山天井日々に低くなり
成長の子へママ嬉しげに利用され
成長を自覚している身のこなし
麻痺の子も同じ赤飯祝うた日
夫の浮気姑名案があると言ひ
名案が浮び過ぎてまともならず
或日ふと流す吾子のたくましさ
孫成長心のギャップ指摘され
赤飯で祝われ老人の日の淋し
赤飯の妻を待たせて三次会
初孫の口へ一粒赤御飯
名案の浮ばぬままに時間切れ
高知川柳社（高知市） 川竹松風報
定期便のような夫で安心し
安心をしきつた籠の鳥がなく
安心して働く精密検査をし
コスモスの押花に秘めた一昔
コスモスにせかされている毛糸針
スモッグに耐えて一輪菊匂う
スモッグを下界に見ている日の登山
スモッグに新型があり光化学
葉のとこまで妻も読んでいる新刊書
集つまつた文珠の知恵になおまよい
口にする勇氣がなくてすねている
障子締め只今恋の準備中
長男の酔いたい気持よう判る
仏様はお嫌いのバラ咲きほこり
世帯もち上手か下手か酌き上手
隠された過去媚態の中に見る
栄転はスモッグのひどい空の下

振りもどす心ちいさな嘘をもち
台風の子報へツバメみだれ飛ぶ
川柳まばたき 出原敬一報
拒絶する意志だたばこの輪が憎い
曇りなき鏡へ朝の身だしなみ
あこがれの万国博も汗の旅
町長も過疎対策に汗をかき
人生の敗者に汗の道つづく
買ひそうな路地で金魚屋汗を拭き
冷房のビルから汗は見下され
人生の亀裂に匂う汗に耐え
高原に來た日扇子が邪魔になり
高原の記念写真に牛を入れ
夏の夜も短命のせみなきつづけ
心の荷捨て術なく今日も暮れ
眩惑の海に小舟の停止線
原っぱの風鍵っ子に冷たすぎ
休診日看護婦さんの赤い服
川柳わかやま 垂井葵水報
名作に触れる喜び茶の稽古
青春の感激の再映夫と見る
テレビ見て女が泣けば名作よ
名作の模写へ科学の粋を寄せ
名作も読めぬ国語を習っており
ふるびても名作心にせまるもの
名作は思いがけない拾いもの
合同もどこ吹く風と平社員
合同へ無駄でなかった廻り道
合同に思案ばかりで踏み切れず
合同で造った筈が妻ばやき
歌舞伎座の舞台名作寂として

川柳塔社同人総参加（一人二句以内）

新年号を飾る「ユーモア特集」

（十一月二十五日着便）

川柳に忘れられているものはユーモアである。そのユーモア味のある川柳で新年号を飾っていただきたいのです。

年賀広告受付

本誌五分の一段が千円です。
グループをおもちの方もご利用ください。

★原稿締切・十一月末日

あなたもぜひ一口

この寸法が二百円

川柳塔社

振替口座大阪
三三三六八番

本社十一月句会

日時 十一月七日（土）午後六時
会場 以和貴荘（いわきそう）

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

兼題

柳話
「ラッキー」
「二泊三日」
「免許証」
「本心」

席題
三題（題と選者は当日発表）各題三句
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

阿部柳 選太
児島与呂志 選太
傍島静馬 選太
大坂形水 選太
戸田古方 選太

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

12月の兼題 「もみ手」「推理」
「白羽」「トンネル」

一月号発表表（11月15日締切）

川柳塔（10句） 中島 生々庵 選

―自選は四句以内―

集 近作柳樽（10句） 北川 春巢 選

九輪抄（3句） 清水 白柳 選

課題吟（各題5句以内）

募 「イノシシ」 永尾 英断 選

「賽銭」 丸川 初甫 選

「最高」 大西 八歩 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

二月号発表表（12月15日締切）

川柳塔（10句） 中島 生々庵 選

―自選は四句以内―

集 近作柳樽（10句） 北川 春巢 選

九輪抄（3句） 清水 白柳 選

課題吟（各題5句以内）

「白」 柳 楽鶴 丸 選

「おんな手」 内 藤 ささ子 選

「アイロン」 河村 日満 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 百八十円（送料六円）

半年分 千 百 円（送料六円）
一年分 二千 百 六十 円（送料六円）

昭和四十五年十月二十五日印刷
昭和四十五年十一月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太 郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

〈朝鮮人蔘〉の効用



二千年以上

の伝統をもつ朝鮮人蔘が

この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも

再認識されています

「ヒヤク」は

この朝鮮人蔘の



有効成分をそっくり

カプセルにつめた

現代人の薬です

- 体力を充実させたい方
- 疲れがとれにくい方
- 貧血・冷え症の方
- 老化現象の方
- 胃腸の弱い方



山之内製薬株式会社
東京日本橋本町2-5

朝鮮人蔘エキス製剤

ヒヤク

45カプセル・90カプセル・300カプセル

カプセル

・ペンペン草・

★「川柳雑誌」時代、十一月旬会の案内ハガキには、かならず「文化の夕べ」と入れたものだった。だが、「川柳塔」になってからは一回も入れていない。別にどうということもないのだが、ことしあたりに入れてみようかな。ナンセンスかな。

★ことしも「はたらく」の特集した。近い将来、採算のとれるようにして出版したい。異色句集だとも思うのだが、どうかナ。

★万博の句を雑誌欄から整理してもらった。日本の遺産とまでいわれたデッカイお祭りのわりには貧弱なスペースだ。まあ参加することによって意義があると逃げておこう。

★大阪市文化祭川柳大会がウチの当番で十一月二十三日に開催される。一人でも多いご出席を祈っている。

★今月は「文化」という字がハンランする。字といえど若本多志氏が本号に「文字の難しさ」のなかで、ボクが故路郎先生のもとに長くいたから文字にやかましいのだから、と書いておられる。だが、こと文字に開

するかぎり、先生よりボクのほうがやかましかったようである。

★ボクが「川雑」へはいったころは「勅題」だったのが「御題」にしたり、「帰題」を「帰日」に書きかえた。フソンにも先生に対してカナツかいをテスト申しあげたこともあった。全国硬筆作品展で文部大臣賞の中学生のお嬢さんが「おとなは誤字が多いのか」と。

★たしかに日本の文字はむずかしい。ボクなど今までに新聞紙をトイレの中へまで持っているが、知らないことが多すぎるのでナサケなくなる。

★若いころ、当時の編集長がひじょうに毒舌家で「おめエ、モノを書いてゼニをとっているんだ。ウソの文字を書いてホンモノのゼニをとるなんてひでエ奴」この毒舌編集長から文字に對したの恐怖感をききあつつけられたのである。

★また年賀広告のシーズンです。よろしく願いいたします。ご清栄を祈ります。

(不二田一三夫)

純良医薬



第一製薬

うちみ・肩こりに
べタンと貼るだけ!

〈新型パップ剤〉

パテックス



● 140mm × 100mm Ⅱ 3枚入

★健保適用

肝機能の保護と改善に！

グルタチオン製剤



グルタイド® 注射用

高純度のグルタチオンであるグルタイドがエネルギー代謝、諸酵素賦活、解毒など優れた作用を発揮します。

- 【臨床応用】
- 各種肝疾患、術前・後の肝機能障害
 - 妊娠中毒症、自家中毒、小児消化不良症の予防と治療
 - 各種アレルギー性疾患（湿疹、蕁麻疹など）
 - 放射線障害の予防
 - 角膜疾患および白内障の予防と治療
 - 糖尿病時の糖代謝の改善



田辺製薬株式会社
大阪市東区道修町3丁目2番地

剤型	包装	健保薬価
100mg	10管、50管、100管（溶解液2ml 添付）	1管 ¥240.00
200mg	10管、50管（溶解液4ml 添付）	1管 ¥470.00

1959G2



一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影